功績や茂兵衛の如き孝義の人ふして斯子あり竹村茂兵衛の言行を記し來れば終始相一致せるを見る眞に感ずべし

○西村與兵衛の事

一老婆の泣話に俄然感激し

貿易商を試みて家名を復す

海の内外と時代の古今を論ぜず人の成業ふ二樣あり一ハ蹇然として漸次に成業を遂ぐる者なり一は意外の事柄に俄然感激して成業を告ぐる者なり开は天禀の性質に因りて異なるものなれば釋迦をして再來せしむるも孔子をして再生せしむるも天下の公衆をして其性質に反對なる一方に片寄らしむるの術なかるべし亦之を片寄らしむるの必要なきなり二樣中孰れの道を採るにもせよ業の成ると成らざるは唯熱心の厚薄に因れるのみ故に熱心力は成業上の最大原素なり之を要するふ熱心力の强き者は感激力も亦强し熱心力も强く感激力も强き者ふして成業の結果なき者ハ天下に稀ふり天保年間に其事跡ある

西村與兵衛は蒲生郡市の邊村の人なり父は呉服商を業として相應の商人なりしが與兵衛は幼年の頃より淨瑠璃を口荒み稍々遊蕩ふ耽けりしかば父は痛く心配して商人は淨瑠璃抔を口荒み醉人めきたる振舞にては末頼母しき商人とはなり難し老の身の樂みに茶を立て花を生け淨瑠璃を口荒むハ世ふなき事にハあらざれども开は壯年の時萬難を厭はずして商賣を勉勵し家業の整理も就きてより難なく家督は其子に讓り何に一つ心配なき隱居せし人の樂みなり今ゞ水火も恐れずして働くべき身の汝等は天秤棒を肩にして知らぬ他國に蹈み入りて旅商を勉勵し本店を堅め支店を設け家業の繁昌を圖るべし淨瑠璃抔を吟哦り廻る時にハあらずとて朝な夕ふふ警むれど下手の横好き止め度なく父の意見も寢耳に水三度の飯は一度でも淨瑠璃は仲々止められず父の目を竊みて村里を遊び廻り今日ハ此處明日ハ彼處と下手淨瑠璃の棒組みを集めつゝ凡そ虚日もなき迄に耽け居りしが或日村里に淨瑠璃の會ありて與兵衛も其席に招かれしかば明いたる口に

牡丹餅と喜びて逸早く出席し得意然として扣へたり彼れ是れする内下手淨瑠璃の棒組も集ひ來て夫〻支度を整ひけるが暫くして日も暮れ掛りしかど聽手も追々集ひ來つ待つ間程なく幕明きて二十四孝や太閤記朝顔日記の感所など摘み語りを歡びて聽き會ふも村人の物珍らしく思ふ故おらん斯くて四五人も濟みてより與兵衛は此夜の取り語りとて大切りを務むる太夫なりしかば意氣揚々として高座に登り樂屋より讀み上ぐる口上の聲の終るを遲しと待ち兼ねて咳きし朝顔日記大井川の段を語りしが手を延ばして見臺の兩端しを確と握り一生懸命に聲を揚げ自ら涙を流しつゝ吾れながら斯く迄感するものを人は尚更感ぜしならんと頭を擡げて席を眺むれば這は如何に何時の間にやら聽衆は席を立ちしならん六十路許りの一老婆が席の中央に座を占めて與兵衛を眺め潸然として泣き居りしが與兵衛ハ心私かに思ふ樣偖ては吾語り樣の餘りに悲しき故一時も席に居堪へずして歸しならん又此老婆は立ちも得堪へず泣き居るならんと誇顏に高

座を下り老婆の側に身を寄せて聲を掛けやよ老婆吾語り樣も左程下手ふはあるまたと問ひければ打ち聞きて老婆は涙を拭ひ徐ろに答ふる樣吾悲みは淨瑠璃の語り樣に絆されて泣くにハあらず思ひ廻はせば今は昔なり吾倅も當年はれ前さんと同じ年頃にて矢張幼少より淨瑠璃抔を口荒みて遊蕩に身を破り果ては村里にも居り兼ねて父母を打ち棄て雲霞み何くともなく逐電せしが吾倅も今頃ハ耻を耻とも思はずに滿座の中で下手な淨瑠璃でも語りつゝ諸人の笑ひ者とおりて居ハせぬかと他人の事も吾子に引き當てゝ悲めりと云ひ終り又もや潸然として泣き出せば始終を打ち聞きて與兵衛は俄然として後悔し嗚呼吾れ過てり〳〵父母へは不孝吾身に耻辱身を切り割きても尚ほ足らずと數回嘆息し高座に在りける淨瑠璃本を引き破り老婆に厚く禮を述べて暇ひを立て是より遊蕩を打ち捨てゝ」同村ふて豪商と聞へし呉服商西村十郎兵衛の許に奉公して萬艱を忍びつゝ熱心に商法を學びしかば幾何もなく商機を覺り主家にても大に信用し重役を勸む

る迄に進歩せり嗚呼敏捷なる哉與兵衛の改心は意外なる一老婆の泣話に俄然感激して成業の本を開けり實に熱心力と感激力ふ富める者審然として勤むれば業を成すこと速かなり斯くて與兵衛ハ主家に用ゐられ蹇然として勤むる内父は不幸にして商運拙く二三回の失敗に一萬兩の負債を受け其督促劇しき故與兵衛は父の難義を見るに忍びず主家にて許さゞれども無理に暇を請ふて歸宅の上家財を纒めて賣り捌き足らずながらに負債を返し是より江戸表へ出でゝ或人の許に食客となり居りしが安政五年外國貿易開けし時或人より資本を借り受け貿易商を始めしに思ひしに増して利益多かりしかゞ先きに足らずながらに片附け置きし債主に不足金を返却せしが其債主の中に三百兩程返却すべき人ありし故與兵衛は之を持參して前年ハ思ひの儘に金融附かず遲延せりと言葉を添へて返さんとしたるに此債主ハ仲々受取らず與兵衛が著しき改心を賞讃して云へる樣失禮なれども此不足金の三百兩ハ其許が改心成業の祝として進らすべし辭退し給はゝ却て喜ばしからずとて受取る景色もなかりしのば與兵衛は詮方なく納め置き後年に至りて其債主が村里に神社の拜殿を建立の際金三百兩を其儘寄附せしとゞ當代に至りては東京京橋區富澤町ふ支店あり商業愈々繁盛ふり宜なる哉熱心力は成業上の最大原素なり之を要するに熱心力の强き者は感激力も亦强し之を兼ぬる者にして成業の結果なき者は天下に稀なり开は西村與兵衛の事跡を見るも其の實を知るべし

○岡田八十次の事

昔し松前の産物を諸港に販賣し海上に靈物を見て箱館に祭れり

明治日進の今日ふ於てハ海上陸路倶に便利なるが故に渺々たる大洋を隔てし歐米の産物を輸入するも又吾國の産物を輸出するも皆な容易なり況んや北海道の産物を内地に輸入し又之を輸出するに於てをや然れども今を距ること幾んと三百年前なる寛永年間に於て北海道

の産物を内地の諸港に運搬して其需要を贍はすが如きは其困難懐ふべく其功績賞すべし蒲生郡八幡爲心町の商賈岡田八十次は寛永年間の人なり八十次は同郡加茂村に生れ夫より織田信長の居城地たる蒲生郡安土市街に移り此に永住せんとて居宅を搆へしかど幾何もなく同城瓦解に及びしかば安土市街の居民ハ擧つて八幡に引き移り思ひ〳〵に居を搆へけり此時に當りて八十次も安土市街を去て八幡に至り現住の爲心町に居を卜して商業に從事せしが其頃八幡にてハ花々しき商利を獲るに由なしと思案しつ遙に去て奥州南部に旅商し南部領なる八戸港を本據と定め港の東西遠近の各村に奔走して呉服太物類を賣り捌き又傍ら商船を造りて松前城下に往來し商品を運湊販賣せしが同港の近傍ハ寒村僻地多くして宿志を伸ぶること能はざるを知り遂ふ松前港に航して該港を專業となせり却説當時ハ時運草昧に屬して同港の市街未だ全く開けず商人の宿泊に便利なる旅籠屋もなかりしかは松前侯の藩士にて工藤某の座敷を借り受けて住みけるが

暫らくして地理をも知りける故同港かる大松前に假宅を搆へ之を支店として呉服太物類を賣り捌けり之れが岡田家支店を設くるの始めなり斯くて商賈を勵む内松前侯の勝手方及び同藩士の日用品に至るまで調達方を承り且又其領地なる東西蝦夷地漁場の内數ヶ所を監督して漁場を開拓し遂に此漁場より産する鯡、鱈、鮭、煎海鼠、鮑、昆布等を北陸道の諸港へ運搬して北海道ふる産物の販路を擴めたり此頃は海上陸路共に不便にして自ら渡航するにも種々の困難を極め荷物の運湊にも困難の多きに屈せず撓まず内地の需要を贍はして海産物の收獲方と保存方を改良せり偖又八十次は或時松前港に赴く海上にて波間に隱見出沒して流れ來る物を見けるが追々流れ寄りて船ふ近きしかば怪みながら拾ひ揚げて之を見るに神か佛か識らねども正しく一個の木像にて靈物と見へしかば崇拜の念勃乎として止まざりけり時に風劇しくして激浪の爲に箱館灣に回船して龜田村に上陸す其頃箱館灣には人家ふき故旅人は皆な龜田村に宿泊せり斯くて八十次ハ此村

に止まりて其木像を金刀比羅大神と崇め村人と相計り爰に社祠を立てゝ安置せり夫より期日の祭典には一回も懈らず參詣せしが現今箱館港の興隆寺なる金刀比羅の神像は八十次の祭りし木像なりと聞き及べども同港は往昔より數十度の火災に罹りたれば今に其神像を保存するや否や定かならず兎に角八十次は篤實の性質にして猥りに神佛を悔らず厚く信仰して寄附や布施等に財を投ずるを吝まざるのみか金刀比羅神社を建立せしかば其近傍の村人等に信用せられ八十次といへ最篤實の商人なりとて評判高く爲よ商業も舊に倍して繁昌せりとゞ開へ別に商業上の秘術にはあらざるべしと雖ども畢竟其時代の人心に適合せし結果ならん商業上の信用へ學理ふ因りて確定せしものゝ如く斯くすれば必ず信用を得べしとの定説あるにあらず臨機應變時勢を制して後れさるふ在り最と波み高き商海に舟渡りて富榮なる湊に達せんとする商人は如何なる事柄にても破廉恥と惡業を除くの外は敏くも己が本業に應用し來り自若として商機を進むべし然ら

ば招かざれども信用自ら到り知らざるまに〳〵財寶高まりて家榮へん道は若き商人の心掛けても尙ほ心掛くべき事共なり八十次は晩年に至りて家督を長男に讓り隱居して禪門に歸依し自ら玄秀と號す慶安三年五月八十三歳にして自宅ふ歿せり當代八十次は家名を繼ぐと雖ども未だ幼少にして家政を整理するの任に堪へず父八十次は諸事を監理して祖先の遺業を亂さず現今へ北海道なる小樽の支店を擴張し又時宜に由りて薩州鹿兒島に在りける支店を廢し更らに日向國南那珂郡福島鄕に桑園及び棉圃を拓き家事愈々盛んなり内に富饒ふる物品を外に出して内に不足なる物品を内に入るゝは國の内外に於て輸出輸入と云ふ輸出を進めざれば其國富まず其國富まざれば人民窮す外に餘裕ある物品を出して内に不足なる物品を補ふへ國を富まして人民を饒ならしむるの術なり岡田八十次の如く利を射ると共に國益を進むる商賈は盛んふ起らば吾國も早晩東洋の英國たるべし

○岡田小八郎の事

一日碁を圍て大石を所望す

大石を引き來て愛顧を受く

求めて人に愛せられんと欲する者は却て人に斥けられ求めて人に信ぜられんと欲する者は却て人に疎んぜらる人に愛せらるゝと信ぜらるゝとは已れが曲りなき精神と其精神に悃らざる所業とに因て自ら到れるものゝ如し愛と信とは元來物の表裏に似たり人を愛するの心なければ人を信ずるの心なし人を愛する者一人其人の善美を唱ふれば轉傳して百人之を愛し終に千萬人之を信用するに至る故に愛と信とゝ自ら求むるものゝふあらず他人之を唱道して自ら己れに歸するものなり這は業の何たるに拘らず一般の愛と信とを概論せしものなれども商業上の愛と信とに於けるも自ら求めて得るものにあらず其心情と所業とに自然妙味の存する所ありて他人之を唱道するものなり故に商業ふ身を置く者は一私人に對しては一私人の氣質に投し一國に對しては一國の氣風に合して商ふは矢張商術の一なるが如し是れ自ら愛と信とを他人に求むるにあらず取りも直さず商業上の勉勵にして廣く花主を得て商業地の區域を擴むるものなれば他人は又其心情を愛し其所業を信じて商機を進むるに至るべし自ら求めざれども有力者の愛顧を受け遂に其唱道に因りて轉傳信用を博せし岡田小八郎は蒲生郡八幡の商人にして寛永年間の人なり同郡岡田八十次の分家ふして岡田家は累代小八郎と稱す爰に綴る小八郎は初代小八郎なり其始め本家なる八十次の爲に九州地方へ旅商せしが其内專ら鹿兒島へ旅商せり斯くて小八郎は屢々鹿兒島に旅商せる折柄同國の藩士某と交際して最と親密なりしが豫てより其藩士と小八郎と圍碁を嗜みしかば遇ふ度毎に碁を圍て樂みけり或日も小八郎は商用の暇を得て藩士を訪ひ行き何時もの碁座敷に打ち通れば此日は霖雨漸く霽れ彌り廣やかなる中庭の飾り石や木の葉へ水氣を帶び雨後の眺め一層美を增して燦然たり兩人は此購ひ難き風光を賞して酒杯を傾けつゝ又もや圍碁を始めしが藩士暫らくして云へる樣今日は天氣も和らぎ

て何んとおく愉快なり斯くて徒らに碁を圍むハ興湧し何か互に物を賭けて打たずやと云ふに小八郎は手を拍て大に歡び賭け碁は最と興多かり去りあがら何か好き賭け物こうと沈吟せば藩士ハ莞爾と云へる樣吾れ負けなば賭け物ハお前の望みに任かすべしと云ひ放てば小八郎は愈々歡び若し私か負け込まば商人の身として別段差上ぐる物もなし身分相應に金百兩差し上げんと約束し石を握りて黑白を定め常石に外れずと互に陣取巧みに打ち出し煙草盆の火の消へるも知らずして稍々あばらく挑み戰ひけるが碁盤に餘地なき頃は互に死生の石ありて勝負を分ち兼ね石を握りて圖を造れば藩士の負けとなりしかば藩士は頭を撫でゝ笑ひを催し負け込みたれば是非もなし賭け物は約束通りお前の望み次第なり卒望めよと云ふに小八郎は中庭を指し私は豫てより御庭の飾り石を好ましく思ひ居りたればあの大石を頂戴し度しと云ふを聞きて藩士ハ大に笑ひあの大石は吾れも常々愛觀したれども約束なれば遣すべし左ハ去りながら斯る大石を何

れへ持ち行くや足下の古郷なる江州迄は運ぶまじと云へば小八郎は莞爾と笑み勿論古郷へ運送致すなりと答へしかば藩士は呆れ果て這ハ面白し直ちに持ち行けよと云ふ返答に覆めて頂戴に罷り出でんと云ひ捨てゝ馳せ歸りけり後にて藩士は獨り私かに思ふ樣小八郎ハ元來豪膽の商人にして義を重んじ人と約して違ふことなき氣質なれども流石は十露盤を胸に置く商人のことなれば古郷迄ハ道の遠きと費用の多きに我を折りて明日ハ必ず詫ひをして金子にても求むべしと其夜は臥房に入りにけり翌朝未明より門外喧しかりしかば藩士は何事の出來たるぞと頭を擡けで聞き澄す内家人は忙はしく臥房ふ來り只今小八郎ハ數多の人夫を引き連れ御約束の庭石を頂戴せんとて扣へしが如何取り計ふべきやと云ふふ藩士は岸破と身を起して小八郎に面會し昨夜心私かに思ひける事共打ち明して其豪膽にして約に背かざるを賞讃せり小八郎ハ早速人夫を庭に廻ハして大石を掘り起さし即日古郷へ向けて運送せしが今尙ほ小八郎が八幡の宅なる庭に

在り斯くて後藩士ハ小八郎の豪氣朴訥仁に近きを賞讃して止まず同藩の誰れ彼れに遇ふ毎に小八郎が人と爲りを唱道し商人には珍らしきとて賞讃せしかば是より小八郎は薩州藩士の愛顧を受け追々信用を博して商機を進めしとぞ實にや商業に身を置く者は一私人に對しては一私人の氣質に投じ一國に對しては一國の氣風に合して商ふを要す薩州人士は元來豪氣を嘉みして約に背かざるを尊ぶ小八郎の心情と所業は同國人の氣風に投合せしが故に求めざれども愛と信とは自ら(をのつか)到れり然れども既往の事跡ハ現在及び將來の龜鑑なれば今日の商人にして之を商機運用上の參考とせば想ふに利益あるべし偖又岡田家は屋號を松前屋と云ふ曾て尾州名古屋ふ支店を開きて繁昌せしが後年に至りて尾州名所繪圖に其壯觀なる店頭の有樣を載せたり現今は京都に開店して商業盛んなり岡田小八郎も亦商術を知りたる商賈ならずや

○伴傳兵衛の事

柳川侯と碁を圍て終夜眠らず
元日に門松を得て商業榮へり

日本帝國第一の都府なる東京にても目下繁華の市街たる日本橋通りは德川氏開府の始め第一着に開きし所なり其頃は未だ武藏野原の眺めを止め武藏野の梅が枝に鳴く鶯も多かりしが今は四里四方繁華の都府にて人家稠密し武藏野の眺めハ今ゞ名のみ殘れり左れば東京日本橋通り今日の繁華に遠く與つて力ある二代目伴傳兵衛は蒲生郡八幡の商人ふして明暦年間の人なり伴家は世々傳兵衛と稱す初代傳兵衛は其始め蒲生郡安土に住し慶長の頃八幡に移轉して扇子麻布蚊帳疊表等を關東に賣り捌き寛永年間江戸に支店を設け江戸勸番なる諸大名の邸ふ出入りて江戸商業の基を開けり爰に說く二代目傳兵衛ハ江戸表に出でゝ父の遺業を擴張し頗る父の豪壯なる氣風を存す又商業の暇には常に圍碁を樂みて餘程强かりしとぞ圍碁は樂の一にして技藝なり天性之を嗜む者業の暇に之を樂みて足るを知り敢て業を妨

げされば業務繁忙にして精神疲勞せし時之を慰はしむるの効あり俗ふ所謂疲を拔くものなり殊更戊辰以前武斷政治の世に於ては軍人大に之を嗜めり幵は圍碁の常石なるものは軍略に屬する所多ければなり故に碁を圍みて強き者は王侯相將の邸に往來して之れが楷梯となり遂に立身出世したる例に乏しからず商人にても王侯將相の邸に出入りして圍碁の御敵手を爲し爲に引き立てられて商業繁昌せし例もあり然るふ圍碁は親の死目に會はず抔云へる俚言ありて稍々社會技藝の外に擯斥せらるゝが如しと雖ども度を知りて嗜む者は益なきにあらず只圍碁を嗜むこと甚しく終に其度を外づして之れに溺るゝ者は親の死目に會はざることもあるべし若し概して圍碁は親の死目に會はずと云へゞ獨り圍碁のみにあらず天下の技藝にして樂みに屬するものは皆然りと云へざるを得ず斯る併言を唱ふる者は畢竟するふ技藝を以て單に遊びの道と成し恰も馬車を挽ひて急駛する馬の如く目隱しを掛け只一參に一筋の道を駛りて左右を見ず技藝を以て他の

事柄に便用する應用力に乏しき者なり其甚しきに至りてハ藝は身を殺すと云へる者あり豈亦愚ならずや歐米人士は學者にもせよ商業家にもせよ己が本業の外に一の技藝に長するを尊ぶ想ふに此技藝を以て己が本業の進步上に應用して利便を得るが爲なり況んや圍碁は吾國現社會ふ於ても上流及び中流の人士に交際を厚ふするの楷梯となるふ於てをや商業家の如きは圍碁を以て强ち無用視するを得ざるなり然れども圍碁は社會に必用缺くべからずと云ふにあらず天性圍碁を嫌ふ者は自ふ嫌ふ故を以て天性圍碁を嗜む者を擯斥して圍碁ハ宛も害物の如く云ひ爲すは僻眼者流の見あり唯度を外づして溺るゝを慎むべし偖又傳兵衛は江戸表に商業を勵む內像て筑後柳川の城主立花左近將監の邸にも出入りして時々圍碁の御敵手を成せしが或年の大晦日の晩商用ありて同邸に至りしに左近將監は武將のことなれば大晦日とは云ひながら何の取引もなく支拂方は家來の役己が身は最と暇なれば誰れゞ客にても來よかしと思へども大晦日の晩とて客も

來ず徒然に堪へ兼ねし折柄なれば傳兵衛の來るを大に喜び興座敗ふ引き入れて碁を圍みて樂めり斯くて迭みに勝敗を爭ふ内玉兎西山に春きて火を燭し又黒白を爭ひしが夜も追々更けしかば傳兵衛ハ暇を告けて歸らんとせしに左近將監ハ今一石と止めたり傳兵衛も圍碁ハ豫てより嗜めば打たんとしたれども明日は元日のことなれば松飾りや何や商や仲々に忙しければ最早歸らんと思ひ返して再び暇を告げ强ひて歸らんとせり左近將監之を止めて云へる樣明日は元旦のことなれば松飾りの差圖抔にて嘸ぞ多忙ならん斗ハ心配無用なり明朝其方の歸宅前に家來の者供に申附け必ず立派に立てさすべし先づ今宵は平座ぎて夜の明る迄碁を圍まんとありしかば傳兵衛は今ハ忌なみ得ず云ふがまに〳〵打ち平座ぎ迭みに勝ちを得ばやとて三四回も打つ程に夜はほの〳〵と明けにけり時に勝負も定まりしかば傳兵衛は直ちに暇を告げて終夜ら碁石一目を爭ひつゝ目を赤くして歸りしが已が支店の門口に近けば其頃江戸中の商人にて誰れ一人として飾り得ざる迄立派ふて飾り整ふたり傳兵衛は吾ながら餘り見事なりし故吾家にあらざる心地して偖こそと思ひ家族の者に尋ぬれば家族の者は喜びて昨夜左近將監の御家來七八人も來られて忽ちに斯くも立派に飾り賜へりと告げしかば傳兵衛も大に歡び年新まる今日よりして斯る吉事のありけるは實ふ目出度ことならずや愈々商業榮ふの吉兆なりとて家族一同賑はしく元日を迎へしが最と珍らしき〳〵飾りなりし故此事忽ち市街に評判高くして信用を重ねし折柄日ふ月に商業繁榮に赴けり明暦元年より慶應年中に至るまで毎年左近將監の家來七八人宛來りて〳〵飾りを整へしとぞ當代に至る迄十二世を累ぬれども祖先より連綿として東京日本橋通りに支店あり實に伴傳兵衛は東京日本橋通り今日の繁華に遠く與つて力ありと謂ふべし記して愛に至れば技藝は身を殺すものにあらずして身を援ふものなり唯技藝は已が本業に應用して利便を得るに止るを怠るゝ勿れ

○山田新治郎の事

有屋の薄情に烈しく憤激し
覇政衰ふる時金利を得たり

語に云へるあり三人行へば必ず我師ありと二以上は物の數なるが故に必すしも三人に限るにあらず人と廣く交はれば其内には事に當りて有情なる者あり薄情なる者あり善人もあり悪人もあり物に觸れて感覺の鋭き者もあり鈍き者もあり事業に巧みなる者あり拙なき者あり才士もあり愚人もあり開ケは人間界の狀態にして既往今來免れざる所なれども已が心の持ち様に因りて吾を導く師匠ともなり吾を破る仇敵ともなるべし想ふに有情なる者に交はらば吾情を進め薄情なる者に交はらば自ら薄情に陥らざるを勉め善人を見て吾本性の善心を進め悪人を見ては悪に陥らざるを考へ感覺力を進め事業を勉勵し才士に遭ふて才智を磨き愚人に遇はゞ之を教ゆる心して偏に吾本業を勵みなば交はる人として吾師匠ならざるはなし左ればあそ世ふ云ふ哲學の祖先たる希臘のソクラテスも曾て云へるあり人の學ぶべき者

い人なりと然れども凡人の能くする所ふあらず感激力の鋭くして事に當り物に觸れ機敏なる者能く之を行ふべし概して云へば名を舉げ家を興す者は感激力の鋭き者に在るが如し山田新治郎と呼べる商人は蒲生郡南津田村の農夫深尾新左衛門の二男にして弘化年中の人なり幼名を新藏と呼び其始め田畑の耕耘を事とせしが常に農利の僅少にして家を富ますに足らざるを嘆息せし折柄或人來て商業の利あるを勸めしかば商業に身を委ねんと心は決したれども資本なければ詮方なく時機を窺ひ居りけるが其後或人の媒妁にて山田氏の相續人となり名を新治郎と改めて小間物及び呉服を擔ひつゝ遠江の國なる諸郡諸村に旅商を始めけり其頃ハ資金二百五十兩ありけるが爾來二十年の其間同國に往來して一日だも期日を違へず勉勵せり斯くて節儉を專らにして苦財せしかば慶應元年の頃ハ資金も漸く增殖せしが其頃新治郎は二名の商人と申合せ都合三名にて商業組合を結び或侯の國産を引き受けて販賣し追々好運に赴きしかば三名等しく喜ひで迭

みに販賣を勉むる内、人の心の定めなきは秋天に異ならず組合仲間の一人は心變りて正しからざる所業を爲せしに依り堅く結びたる組合も初霜の朝日に解くるが如く瓦解して一場の葛藤を開き二年餘りも過きけるが熱度益々熾んにして理不盡處行多かりし故新治郎も今ハ堪へ兼ねて官の裁定を煩はさんとしたれども頃ハ戊辰の元年にして二百五十有餘年の打ち續きたる德川の覇政も愛に衰へて幕府黨と勤王黨が吹き出せる喇叭の音ハ古戰場を吹き過ぎる風の音よりも慘じく西ふハ伏見及び二本松の戰爭となり東にハ上野の彰義隊及び宇都宮の激戰とあり北には出羽奥州及び松前の變亂となり幕府倒れて明治新政府將に起らんとせし際なれば裁定を請ふ所もおし新治郎は心のみ焦燥てども時勢の變遷に是非もなく憤涙を呑んで過ぎける内、大方ならず損耗を來して家事向不如意となりし頃豫て出入りの肴屋は鯉鮒や海魚を數多搨ふて新治郎の宅に寄り何か魚ハ如何にがと呼びける故多年出入りの肴屋なれば心置きもなく此頃は吾家も以前と違

ひ云々の次第にて家事向不如意の身となりて肴も以前の如くは入用なしとて聊かの魚を買ひ求めしかば肴屋は新治郎の話しを打ち聞きて心窃かに思ふ樣偖てハ此家も以前とは違ひ貧乏神が舞ひ込みしか斯くては拂ひも澁り果ては損することゝもならんと心配して云へる樣私も此頃は損耗のみ打ち續きたれば貸し賣りは一切仕らず現金にて賣り居れりと云ふを打ち聞く新治郎ハ二の句も繼がず現金にて買ひ求めしが肴屋が去れる後吐息を吻きて慨嘆し人情は斯く迄も淺間しきものなるか多年の間吾家に出入りして最と親切者と思ふ故彼れが資金に逼迫せし時抔は金子を貸し與へ及ぶ限りハ世話せしに吾家不幸にして他人の爲に害せられ不如意の身代となりしを知れば忽ち反覆して現金にて賣らざれば肴代をも拂はぬかと恩を仇なる言の葉は實に口惜しき限りなり今にも商機に乘じつゝ以前に倍せし資財を保ち今日の耻辱を雪んと痛く憤激俄然として思ひ附き斯くて茫然と光陰を消しなば此上ハ倍々貧賤に陷りて人の辱しめを受くること

限りなしと奮ひ勵み頻りに東海道へ旅商し明治元年より十四年の頃迄細々資本を積みけるが最早餘程の身代となり嚴重に家政を改めけり或日新治郎は熟々時勢の成行を考へ見るに今ゼ日に月に物價下落する折柄なれば資本を經めて貯蓄するの勝れるに若かずとて其子にも商業を營む時にあらずと警めしとゞ其當時新治郎が商業に手を引きて貯蓄せし事跡を見れば强ち利益あるべしとも思はれざれども今日に至りて考ふれば先見の明なるを見るに足るべし开は明治十四年頃と今日とは物價の上に變動あり今日は都て物價下落したれば貯蓄せし金員に自然價格を持ち先見其圖に當りて大に利益あり商業は猶ほ戰ひの如く進んで利なることあり退ひて利ふることあり進退の宜しきを見るは商業上の見込と云ふものにして凡商の考に及ばざる所なり偖て新治郎ハ常ふ其子及び奉公人を警めつゝ明治十六年京都の支店ふ於て歿す當代に至りて貯蓄せし財寶を散じて商業を營みしかば財寶に價格を持ちて盛んに利益を得たり新治郎が一時商業に手を

引きたるは經濟上に實驗ありて時勢を看るの明ありと謂ふべし實に三人行へば我師なきにあらず人ふ廣く交はりて種々樣々ふる事柄を斟酌取捨し偏に吾本業を勵む者は感激力の鋭き者なり世に感激力の鋭き者は一時不幸にして禍害を蒙ることあるも亦終に家政を挽回するに至るべし果せる哉人の學ぶべき者ハ人に外ならず人にして名を舉け家を興す者は概ね感激力の鋭き者に在るが如し今日の商賈も亦能く時事に感憤興起せよ

○鵜川與助の事

一日怒を忍びて默し去る

終ふ近江醸醬の巨擘たり

怒るとは情の面ふ見ハれたるを云ひ憤るとハ面に見はれずして情の動くを云ふ怒りは心の火事ふり憤りは心の光なり事に當りて烈しく怒る者は常に損失を來せども物に觸れて痛く憤る者ハ常に損失を來すの恐れなし憤りハ人を起し怒りハ人を倒す約言すれば怒りは憤り

の破れたるものにして憤りは怒を忍びて眼前の出來事に堪へたるものなり故に憤りを破りて怒りを面に見わす者は遠き目的にあらず怒りを忍びて心ふ憤り眼前の出來事に情を亂さゞる者わ遠き目的あり遠き目的ある者は縱令人に辱しめられ或は侮らるゝも怒りて匹夫の勇を振はず深く心に憤り常ふ此心を心として愈々奮ひ益々勵み遂に其目的を果して耻辱を雪ぎ輕侮を洗ふに至るなり鵜川與助は蒲生郡八幡の商家にして天保年間の人なり其祖先は長兵衛と云て農を業とせしが長兵衛わ遊びに身を入れて農業を營まず農時に後れを取ることゝ屢々なりしかば村里の親戚朋友より忌み嫌はれて信用地に墜ちし折柄長兵衛わ一旦遊びに身を入れて放蕩を爲せしかど斯くては行く末の立身出世は覺束なしと前非を悔ひ是より心を改めて村里の親戚朋友に失ふたる信用を挽回せんと思へども鵜川村なる片田舎にて行ふべき事業もなし依然として農業ふ從事せば其利少なくして儘ならず夫よりわ寧ろ不信用の地を去り他所にて信用を挽回せんと心を決し自ら舊然として鵜川村を立ち去り八幡に出て或人の周旋にて永原町に小屋を掛け竹の柱に藁の屋根最と細々と烟りを立て僅かに商賣を始めたり實に年は流水の如く逝て歸らず人は草木に似て春榮を爭ふ人にして榮へんと欲する心わ名譽心なり名譽心きな者は一旦不幸にして遊蕩に陷ることあれば日々に沈淪して改むるの期なし人名譽心あればこう惡きを去て善きに就き損を捨てゝ益を取る恰も草木の春榮を爭ふが如し人に名譽心の必要なる知るべきなり然れども名譽心の活用は廉耻を知りて身の行く末を愛ふるものにあらざれば能はず平々凡々沈香も焚かす屁も放らず耻辱に遇ふも耻辱とせず將來の方向を誤りながら改めもせず又時に遊びもせず務めもせず豆腐ふ鋏糠に釘なる人間わ俗に所謂不用の人物にして米を喰ふ蟲に異ならず苟も活潑なる社會ふ生存する人間は長兵衛の如く假令一旦誤て放蕩に身を墜すも亦正に秋氣の如く凛然として締る所あるを要す斯くて鵜川家は數代を經過し喜左衛門と云へる人の代ふ至り稍々家政を改革

して居宅を購ひ醸醤を業として活計の道を立てしかど身代未だ富むに至らず喜左衛門ハ孜々として商賈を勉めけり其子與助ハ幼にして才名ありしかば知る人々は之を羨みしとぞ與助甫めて十四歳の時父喜左衛門は一日氣分悪しゝとて病床に臥せしが命數の到れるものか病氣日々に重りて無き人の數に入りしかば與助の悲みは如何許り天性怜悧の者なれども若年にして父を失ひ岸を離れし孤舟に異ならず前後不覺に泣き沈みしが父の友達や親戚に慰められ氣を取り直して野邊送りを濟しけり實に若年にして父を失ふ者は不幸の極なれども命數なれば是非もなし唯死後と雖ども父母の名を顯す者は不幸中の幸ひなり却て說く與助は父喜左衛門が病床にありし頃醤油樽二十箇許り造らんとて兼ねて知り合ひの桶屋に頼み置きしが父喜左衛門が死してより早や數十日を經たれども桶屋は更らよ來らねば與助は或日桶屋の宅に至り樽の催促を爲せしかば桶屋は與助の顏を眺めて冷笑ひ汝の父は先頃死したれば商業を營むことは難かるべし斯れば樽

も入用ならず且又入用ふればとて金の取れざる家にハ賣らずと思へば先日他家へ賣り捌けりとて更らに取り會ハねば與助ハ桶屋の悪口雜言を聞き終り憤然として怒れども斯る無法の人間に相手にふり彼れ是れ云ふハ愚かなりと忍びて面ふ見はさず唯痛く心に憤り此辱しめと侮りを深く心に占めて片時も忘れず是より煙草入や煙管の果て迄家財殘らず賣り代なして資本を拵ひ日夜孜々として醸醤業を勉勵せしかば年毎に利益を得て醸醤ふ好評を受け商賈益々繁昌し當代ふ至りては縣下醸醤家の第一等に進歩せり江州にて鵜川の醤油と云ハば世人の能く知る所なり實にや鵜川與助ハ眼前の耻辱と輕侮ふ出會して更らに情を亂さず遠き目的ありて其目的を果し後世子孫に至るまで本業の名を世に賞せられ家道正に盛なるに至れり若し與助が桶屋の無禮に出會して憤りを破り艶然として怒り猛然として論じなば或は其目的を破りて今日の繁昌ハ保たざるべし元來憤りは心の光りなる故ふ業の光り赫然として當代に繼續す思ひ廻せば無情にして清

き水も風之を激すれゞ波瀾を生じ無心にして聲なき樹木も風之を打てば忽ち鳴る況んや情あり心ある人間をや豈に恥辱と輕侮に出會して憤らざる者あらんや憤りて怠らざる者は遂ふ其目的を達すべし與助の憤りも亦た價値ある哉

○森五郎兵衛の事

始め東都に近江國産を鬻ぎ

主恩を紀念して家愈々富む

學者は學成り名遂げて其師を忘れず商家ハ業成り名遂げて其主を忘れず所は未だ薄弱にして獨立せざる以前を忘れざるものなり之を人の丹心と云ふ德義なる者は元來人の丹心より出づ一私人に丹心を失へば社會に德義なし滔々たる世の中に恩を忘るゝ者は只人間は自由なりとの語を聞きて僅かに固有の權利あるを知れども人間の最も貴むべき義務あるを知らず義務を知らざる者は人に疎んぜられて信用なし信用なければ獨立の事業を營む能はずして孤立となる孤立の者

は假令身ハ關係の繁き社會に棲むも無人島ふ在るに異ならず唯嘯くものは月のみ聞くものは禽獸の聲のみ之れに反して業成り名遂げて後舊恩を忘れずして之れふ酬ゆるの義務を知る者ハ孤立にあらずして獨立なり獨立とは獨り立ちと解すべきものにあらず他人との關係を完ふして權利を曲げず義務を知り獨立の社會に信用あるを云ふなり學者にして義務を忘れさる者は家愈々富て衰へず恩を知るの結果も亦大なる哉森家は累代五郎兵衛と稱し蒲生郡八幡の商賈なり愛に說き起す初代五郎兵衛は元祿年中の人にして其始め同所の豪商伴傳兵衛に奉公せしが中年に至りて主家を辭し夫より煙草商を始めて江戸及び其近國に旅商を試み常に主家に奉公せし心地して花主を擴め信々しく商業を營めり斯くて數年を過きける內資金も追々增殖せしかば遂に江戸表に支店を開ひて專ら近江產の麻布及び關東の呉服を賣り捌き愈々販路を擴張して支店の商業を整頓せり却て說く五郎兵衛は奉公中最と忠勤なりしかば別家して主家を辭する時主家より資

本を分け與へられ且つ褒賞狀を貰ひ受けしが其裏に奉公中の忠勤を記載して主人傳兵衛は自ら印行を捺して與へたり五郎兵衛ハ之を大切にして常に座右に置き片時も忘るゝことなく火災の時抔は近火にても金より道具より第一に褒賞狀を注意し且又佛壇にハ主家の位牌を第一位に置き次に自家の位牌を列べて常に主家の舊恩を紀念せり內ふ斯く迄篤實忠勤の人なりければ外にも篤實忠勤ふして信用を博し終に縣下屈指の豪商とふれり五郎兵衛が舊恩を紀念するの厚き終に名を舉げ家を興して豪商の列に入る人間の本務を知れる者にして一家興廢の道理を見れりと云ふべし若し己が成名興業の始めを忘れて主恩を顧みざれば己が奉公人も之を紀念せず之を勉めず商家にして奉公人が主恩に感ずるなくんば商業振はず終に廢頽して身代を傾くるふ至るべし物の大小は異ふれども上の爲す所下之れに習ふ自ら主恩を忘れずして義務を完ふする者人を用ゆれば人も其行ひに習ひ其恩に感じて主家の利益を圖り主從一致して商業振ひ終に身代を興すに至るべし偖又五郎兵衛が舍弟に和助と云へる者あり之を分家する時五郎兵衛は己が主家なる伴傳兵衛方へ一旦奉公に遣し本家にて奉公人の式を踐み其後更らに分家せしとぞ五郎兵衛は斯く家政を統ぶるに妙あり又常に奉公人を用ゆることと己が手足を用ゆるが如し商賈たる者ハ自ら主家の恩義を紀念して奉公人を使用するの術なかるべからず然るに世ふは言語に絶へたる猾商あり己が召し使ふ手代及ひ番頭にして主家に忠勤なる者陸續として跡を接する時は老勤忠實の番頭幾名も增加するが故に分家上相當の家財を分つを恐れ手代の內より機敏なる者は番頭に至る迄幾年か使用の上正に分家の期ふ近きもの誤りて放蕩をなすも敢て悔悟せしむるの道を謀らず知らざる顏して其不品行を嚴責し憐むべし多年忠勤の手代及び番頭に惡名を負はして放逐し竟に終身の方向を誤らしむ豈に憎むべく忌むべき事柄にあらずや斯る猾商は獨り其手代及び番頭の罪人たるに止らず商業社會全體の罪人なり然れども法律を以て制する能はず唯人間の片

時も離るべからざる德義上より見る時は萬言筆誅するも未だ足らざるなり人多くハ目前に來る現行法律を恐れて德義上より來る誅罰ハ尙ほ是より懼るべきを知らず夫の猾商にして目前の私慾に眩醉し人を誘ふて方向を誤らしむる者ハ己が手足に異ならざる奉公人を損ふが故に自ら己が手足を切るに異ならず終にハ内に不平を釀し外に不信用を來して孤立の身となり家業破れて早晩貧苦に迫らざるはなし之れず暗々裡ふ德義上より來るの誅罰なり世の猾商ハ五郎兵衛が澄める水よりも清き事跡を鑑みて其拙き心を洗ふべし斯くて又初代五郎兵衛歿後七代目五郎兵衛の時に至りて大坂に支店を設け關東呉服及び近江國產の麻布を賣り捌き當代に至りても祖先傳來の家業を擴張し本店及び支店共家族和合して家愈々富む正に是れ獨立の事業ふして恩を知るの結果なり人にして恩を知るの結果も亦大なる哉

○市田清兵衛の事

一日弓矢を拋つて商事に歸し

夙に高崎を卜して安中を去る

夏には冷水を好めども冬にハ之を嫌ひ冬にハ火に近つけども夏にハ之を遠さかる這は人身の時候に投ずるものしにて東西古今同じき所なり夏の暖かなるは招かざるも年毎に到り冬の冷かなるハ待たざるも年毎に來る是を以て三尺の童子も亦能く之を知りて過らず开ハ其年に由りて寒暖の厚薄あるにもせよ地球の運轉ハ年々其時候を違へざればなり然るに時勢ふる者は之れと反對にして變遷敢て究りなし故に盛衰得喪の定めなき商業に身を置く者は時勢の變遷に先ちて商運のある所を看ざるべからず左れば時勢に後れながら商運を看んと欲する者ハ柱に頭を打ちて後始めて傷みを知るに似て眞に商理を知る者にあらず恰も此の地より彼の地に物品を運送し彼の地に到りて後始めて些細なる運賃を得るが如し斯る商人ハ名とゞ商人なれども眞成の商人にあらず取りも直さず商人の天布羅なり天布羅商人は世ふ其數多し早くも時勢の變遷を看破して商運のある所を知る商人は

兵に商理を知る者ふして世に稀れなるが故に其事跡は後世の鑑たるを得べし市田家三代目清兵衛は寶永年間の人にして蒲生郡八幡新町の商賈なり其初代を庄兵衛と呼び神崎郡石川村に住し佐々木家に仕へし武士ありしが一日偶々感ずる所あり弓矢を抛ちて商ふ歸し孜々として商賈を勵む内折しも關白豐臣秀次八幡に居城を搆へしかば八幡は頓みに繁昌せし故庄兵衛も引き移りて新町に居を卜し小間物商を始めたり時に慶長年中なり其長男を二代目清兵衛と云ふ二代目は些かの資金にて旅商を始め小間物を擔ふて信州及び上州の間を奔走し何なりとも物産を持ち歸りて自國ハ勿論近國及び京大坂へも賣り擴めんと勉めしが寛永二十年十月不幸にして中年なる男の盛りを無常の風に誘ハれて父ふ先立ち病歿せり嗚呼爲す有る世の中に其志を遂げず中年にして父に先立つは人間の不幸なれども老少不常は是非もなし二代目清兵衛は市田家旅商の基ひを開けり後世子孫の爲め其功おきにあらざるなり偖又三代目清兵衛は其頃未だ若年なれども

天資頗る怜悧にして父の素志を繼ぎ信州及び上州に小間物を持ち下り上州なる安中驛萬屋左衛門方に止宿して小間物に太物類を增加して其近傍に賣り捌き歸國の時は上州の産物ある麻絹生糸眞綿等を仕入れて江戸及び名古屋京都に賣り捌きて多く利益ありしとゞ其後大坂綿を信州及び上州へ持ち下りたるは清兵衛を嚆矢とふす斯くて清兵衛は商業上の都合に依り安中驛に假宅を搆へ支店同樣ふ商賣せり却て説現今頗る繁盛の地なる上州高崎驛は其頃安中驛に較ふれば之を下ること數歩にして人家も粗造なるのみか家並續きたる本通りにても家の前には廷を敷きて米や麥を乾し置ける程なりしが清兵衛は高崎驛に至る度毎に思ひ廻らす樣吾れ多年高崎の地理を窺ふに今や市街は農商混雜の地なれども其西北ハ信州及び越後ふ接して中仙道の本通りなり東南は又奥州街道に通じて江戸に近し後年必ず物産增殖して貨物集散の便利を保ち終に繁華を極むべしと人にも語りけり偖て清兵衛は豫てより此地の後運を慮りしことなれば愛に轉地の念勃

然として止まず遂に安中驛の假宅を引き拂ひ高崎驛田町二丁目柏屋利右衛門の宅を借り受けて支店を開き嫡男幼名孫市を以て支店の主人とかし是より小間物商を廢して太物及び尾州參州大坂等にて產出する綿を持ち下り之を專業として傍ら古着を賣り捌きけり高崎驛ふ支店を開きたるは正に此時を始めとす今日に至りてハ愈々盛大を極め支店は依然どして田町に在り清兵衛ハ固より一個の商人にして地理學を研究せし者にあらず然れども生來商業上に英敏あるが故に高崎驛の地理を親ふて後運を覺り終に子孫に至りて般富を得たり事物に注意して將來を看破する者は眞に商理を知る者なり清兵衛ハ晩年に至りて淨林と號し正德四年正月二日七十八歳にして歿す當時は八幡新町より同地小幡町に移轉して倍々家業を擴張せり實に三代目清兵衛の如き商理を活用する商人は世に稀なるが故に後世商人の龜鑑となるを得べし然れども今日は寶永年間の如き未開時代にあらず故に商人も亦其價値を異にせり須らく時勢の變遷に先ちて商運のあ

る所を看破せよ

附言三代目清兵衛が子孫に遺せし家則を得たれば左ふ掲げて讀者の一覽に供す

家則

一御公儀ヨリノ法度堅ク相守リ御町内ニ對シテ無禮ナキ樣心得申ベキ事

一商賣ハ以前ヨリ仕來リノ作法ヲ亂サズ同心協力シテ時ノ流行ニ迷ハズ古格ヲ守リ申ベキ事

一店中ノ傍輩ハ和順謙遜ヲ旨トシテ諸事儉約ヲ心掛ケ出入ノ者ハ老若男女ヲ問ハズ叮嚀ニ取扱ヒ申ベキ事

一店ノ者ハ都テ幼ハ長ニ從ヒ手代ハ番頭ニ下知ヲ請ケ番頭ハ商賣向一切支配人ノ下知ニ從フベキ事

一若年ノ者ハ支配人及番頭タルヲ許サズ奉公人ハ中途ヨリ來ル者ニテモ商賣向ニ相當ノ技量アル者ハ引上テ重役ヲ申附クベキ事

一奉公人中縦令相當ノ技量アル者ニテモ支配人番頭ノ下知ニ從ハズシテ氣隨我慢ノ者ハ速カニ暇ヲ遣ハシ替リノ奉公人差入レ申ベキ事

一金銀出入勘定ノ時ハ支配人及ビ番頭立會ニテ相改メ資本繰廻シ方粗末ナキ樣相心得ベキ事

一商賣品ニ不當ノ利分ヲ掛ケザル樣時ノ相場ニ據リテ一統申合セ時貸等ハ一切相成ラザル事

一吾家傳來ノ商賣ノ外別ニ新規ナル商賣ヲ增加スル時ハ店中一統協議ヲ遂ゲ申ベク商品仕入ノ時ニテモ店中一統熟談ノ上正當明白ナル物品仕入レ曖昧ナル物品ハ縦令如何程德用ニテモ仕入相成ラザル事

一奉公人ノ仕着セハ二季ニ分チ木綿麻布ノ外用非ザル樣堅ク相守リ申ベク支配人及ビ番頭ハ奉公人ノ等級ヲ見計ヒ順序ヲ亂サズ相渡スベシ奉公人中若シ自儘ナル衣類ヲ着ダル者ハ篤ト吟味ノ

上支配人之ヲ取リ上クベキ事

右ノ箇條各〻堅ク相守リ立身出世致スベシ

○西川利右衛門の事

二主に仕へず村里の兒童を育す

二代目商に歸して兩家愈々富む

古歌に曰く採れば憂しとらねば物の數ふらず捨つべきものは弓矢なりけり宜なる哉弓矢は戰の器にして殺生の具なるが故に武士にして慈悲深き者弓矢を採て戰場ふ立ち花々しく人を殺せば最と物憂く殺さねば武士の數ならず生來人を殺すを忌む者ハ弓矢を捨るに若くハなし昔し藥師寺某なる者尤も弓矢に老けし武士なりしが一日忽然として此歌を詠じつゝ弓矢を捨てゝ佛門に歸せしことあり實に誠忠の士ハ戰場に立つ時ハ生命を鴻毛の輕きに比して主命を泰山の重きに比す又主家亡びて自ら打死の機會を失ふ時は遠く身を隱して二主ま仕へざるを尊ぶ遠く身を隱す者必ずしも佛門ふ身を寄するに限らず

縱令農に歸し商に依るも古主の名を辱しめて二主に仕ふる者に比すれば其勝れること幾倍なるを知らず爰に說く西川理右衛門ハ寛永年間の人にして蒲生郡八幡新町の商賈なり其祖先ハ勘右衛門とて多年越前國朝倉家に仕へたる武士なりしが慶長元和の際屢々弓矢を採て戰場に向ひ花々しき戰ひして功名手柄も尠なからず朝倉家の忠臣と呼ばれたり勘右衛門ハ生來慈悲深き者にして殺生を忌みけるが朝倉家沒落の頃自ら二主に仕へずと心に誓ひ弓矢を捨てゝ古鄕を辭し蒲生郡市井村に居をトし村里の兒童を教育して細々と其日を送りしが長男ハ仲々豪毅敏捷ふして父に讓らず或時心密かに思ふ樣父は朝倉家の武臣にして忠義を旨とし主家沒落の後も德川家に從て二主に仕ふるを忌み多年其功多かりし弓矢を抛つて此村家に潛み僅に兒童を教育して物憂き光陰を送れども斯くて何時迄も過しなば吾家名を舉げて富を致すべき術もなし最早二主に仕へずと心を定めし身の上なれば萬分の一たりとも主家への忠義ハ立ちし道理なり是より富を致すには商業の外ふ望なし左は去りながら此村里にて商業を始むべき手立もなしとて遂に蒲生郡八幡新町に移轉して二代目西川理右衛門と唱へ疊表緣地蚊帳等を旅商し或時一疋の馬を購ひ之れに荷物を附けて自ら乘り屢々東海道に商品を持ち下りて江戸に赴きけるが其頃理右衛門を知れる人々の口の葉に乘り下りの商人と唱へしとぞ其旅商に怜悧なる知るべきなり斯くて最と着實ふ勉むる內熱心の向ふ所年毎に熾にして花主を增し追々資金も增殖せしかば遂に大坂瓦町一丁目に支店を設け近江屋八右衛門と稱せしが其頃より理右衛門は才商の譽れ高く乘り下りの商品ハ實に良品なりとの好評を得たり宜なる哉理右衛門ハ內には誠忠の心を失はず外には着實に良品を賣り捌き身は商人となりたれども俗に所謂慾に目のなき商人の如く只利を貪る爲ならず富を致して家名を萬世に傳んと計りつゝ千艱萬難に屈せぬ人なれば才商と賞せらるゝも道理なり偖て理右衛門ハ信用日々に厚くして今は商賣の運算其圖に違はず家業愈々進步せしかば時宜

に投じて江戸に出で日本橋通り二丁目に支店を開き名代を大文字屋嘉兵衛と唱へつゝ本店の商品を輸送して商ふ折柄追々御本丸及び西の丸の御用を承り疊表替を勧め其頃名高き給府提燈を賜はりしかゝ萬事に注意して大に信用を博し終に豪商の名を得たり「當時日本橋通りに江州より開きし支店を凡て近江店と稱し江戸繁昌記にも之を載せたり實に日本橋通りの商店繁昌にゝ近江店の効力僅少にあらざるを知るあり偖又二代目理右衛門歿後三代目理右衛門の時は寛文十年なり其頃二男西川庄六分家して矢張大文字屋と唱へ蚊帳綵綿眞綿砂糖を商ふ三代目庄六の時本家に倣ふて江戸表に出で日本橋通り四丁目に出店せしかば之れも近江店と稱せられ本家に劣らず好評を得て信用厚く本家及び別家共當代に至る迄家政整頓して兩家愈々富む本家理右衛門方ゝ初代より今代に至る迄十二代にして別家庄六方は初代より今代に至る迄七代なり」嗚呼人誠忠の心なければ達運到らず誠忠の心ある者は縱令何業を營むに拘らず本心定りて尤も忌むべき狡猾と卑屈の心なきが故に遂に名を舉げ富を致すに至るべし斯る好事跡を綴り來れば世には片時だも默し難きものあり憎むべき哉内には卑屈にして外には狡猾なる商人よ商人の卑屈とは臨むべき機會に臨まざるを云ひ狡猾とゝ他人の利害を念頭ふ懸けざるを云ふ卑屈と狡猾に緣故ある商人は恰も風前の燭に異ならず世に云ふ燭を消すものは暴風と爲せども「开」は獨り暴風のみふあらず今日の如く着々國歩を進むる時代に於てゝ蕩馳たる開明の清風に吹き消されさる能はず其事實は目前に見へ易からざるも日月を累ぬるに從て瞭然たるに至るべし這ゝ一已の私言にあらず天下自然の勢ひなり夫れと此れとゝ雲泥の違ひにて西川兩家の如きは恰も大河の水に異ならず始めゝ滴々として山谷の間より出つれども終ふ洋々たる大海を爲すが如し身は商に歸して誠忠の心を失はず豈に唯二主に仕へざるのみならんや

○西川傳右衛門の事

挺身北海に航して商機を得たり

一身皆な膽にして事業を興せり

膽大なれば事業も大なり膽小なれば事業も小なり艱難を冒して大業を興す者は膽大にして勇氣あり膽力大なれハ物事に臆若せず勇氣盛なれば竟に宿志を伸ぶ西川傳右衛門ハ寛永三年蒲生郡南津田村ふ生る其先ハ六角佐々木家の重臣にして代々有名の武士なりしが元亀天正の際果敢なくも佐々木家は殁落せしかば西川家も其頃より移轉して同村ふ潜み世ハ廣けれども世を忍び細き煙りを舉げ居りしが其後故ありて蒲生郡八幡の仲屋町に移る是れ現に住める所なり却て説く傳右衛門ハ二男にして兄弟數人あり獨り傳右衛門ハ幼年の頃より大膽にして勇氣ありけり壯年の頃に至り一日偶々感ずる所ありて資本僅かに六百目を携へ荒物又は雜菓子抔を仕入れ古郷を離れて越後路に赴きて旅商を始めたり此頃ハ未だ近江にても旅商を始むる者多らざれば上方筋の物産を持ち下りて販く時は利分尤も多かりし故是より荒物雜菓子は何つしか廢して專ら上方筋の物産を仕入れ北陸及び

奥羽地方へ旅商して頻りに花主を擴め年々利益を増して今ハ人並の資本を得たれば心窃かに悦びて何か活潑なる商業を營みて大に家を興さんと樣々に思ひを焦し工夫せる折柄越後なる知人の物語りに松前蝦夷の地方に赴きて盛んふ旅商を始めなば艱難辛苦は劇しけれども未だ全く開けざる土地なれば必らず然るべき利益の見込みあらんと云ふを打聞きて傳右衛門は滿面に笑みを含みつゝ實に辱けなし吾れも疾く蝦夷地に航して事業を興さんとの志は豫てよりありしかど其機未だ熟せずして默せしが今や神佛も吾が志を憐みて貴公の口を假り坐ろに渡航を促し給ふかと悦びて大に勇み立ち旅裝ひもそこ〳〵に船の出日を待ち擂へ鯨波萬里を凌く一葉の船に身を委ね先づ福山の地に着し夫より次第に江刺、箱館等の地を奔走して上方筋の産物を齎らし利益を得ること多かりし故遂に松前の城下に足を留め忍耐勤倹の間ふ日を累ねしが或日松前公の家老にて慈善律義の譽れ高き下國安藝に傳右衛門を紹介せし人ありしかば下國安藝ハ傳右衛門の沈

勇にして才敏なるを愛し一見舊識の如く互に胸襟を開ひて日に交りを厚くせり正に是れ同類相寄り同氣相求むるものなるか斯くて傳右衛門ハ下國家老に遇ふ毎に古往今來の物語りには或は慷慨の涙を垂れ或は大笑して顰(しかめ)を解きけることも屢々なりしが傳右衛門は先きに感ずる所ありて商人の身とはなりたれども心の淡きは水よりも淡く義の重きハ山よりも重ければ下國家老も益々之を信用し遂にハ松前侯の御用をも承るに至りし故傳右衛門は世の諺に云ふ如く勝て兜の緒(ヲ)を占めつゝ唯だ正直を旨として勤めけり傳右衛門は何つもの如く或日下國家老の許(もと)を訪ひけるに家老の云へる樣吾蝦夷の地は日本第一の海産場なれば身を挺でゝ蝦夷の奥地に蹈み入り海産の獵場を開きて之を内地の諸國ふ賣捌かば第一國の爲となり又二つには貴公の利益ともならん去りながら常人なれば危くて迚も勤めがたし吾も未だ巡回せざる土地なれど曾て聞く所に據れば或は峨々たる頂上を踰へ或ハ斷崖の間を行き寒風に面を打たれ積雪を蹈み寒水を渡りて猛

獸に出遭ふなど艱難辛苦一方ならざれば常人多くは半途にして其艱苦に堪へず志を空ふして逃げ歸ると云へり然るに貴公ハ常に沈勇にして才敏ある人なれば能く其艱苦に堪へて志を遂ぐへしと勸むれば傳右衛門ハ磯(ハマ)と手を拍ち深く謝して云へる樣吾れ此地に渡航せしハ實に是等の大業を興さんが爲なり然(しか)はあれども人の信用もなく地理も知らずして輕卒ふ業を興すハ自分の刃を以て自分を切るに齊しければ勃然として悲き起る心を抑へつゝ今日迄時機の到るを待詫びたり今ゞ貴殿の信を得て蝦夷の地理をも略ぼ知れば不肖ながらも萬艱を冒して蝦夷の奥地に蹈み入り何卒好地理を認めて魚獵場を開き大ふ海産業を營みて家名を興し末長き子孫の本業となさん男子志を立てゝ此地を出で若しも事業成らずんば再び生きて還らずと誓を立てゝ勇みけり夫より傳右衛門は蝦夷人に近きづて狎れ親み言語も漸く通ずるに至りしかば下國家老の周旋を得て蝦夷地に踏み入り毛人等と雜居して道順を繹ね山路を探り何卒適當の魚獵場を求めんとて彌

々深く踏み入れり左れば其頃蝦夷の地は家屋少なくして煙りの鳴ること稀なれば夏は天氣朦朧として常に霧深く冬は寒氣凜冽として刀風面を刺すが如し又峨々たる山脈に積雪皚々として所々に喬木の先きを見はすのみ傳右衛門に斯く恐ろしき地勢を物ともせず倍々勇氣を振つて積雪を踏み絶壁を攀ぢ無人の山中にて猛獸に出會ひ將さに嚙まれんとせしことあり或は谷底に迷ひ入りて岩穴に宿りしことも あり眞ふ云ふべからざる艱苦を嘗めて漸く嶮山を踰れば遙かゐる山下に當り洞然として聲あり怪みながら氷の如き足を蹈み占めて下り近づけば滔々たる大河に氷張りて恰も鏡の如し響きし物音は大河に張りたる堅氷の下を流るゝ水聲なり傳右衛門は斯る艱難辛苦を經て遂に忍路の地を卜し爰に始めて獵場を開き其近傍得るが儘に網を下し福山に支店を設けて多年の志を遂ぐるに至れり或人曾て蝦夷地に至り其有樣を詠ぜし句に

半分は氷に減るや

寄るなみ

と云へるあり其の寒氣凜冽の慘たる想ふべし嗚呼盛んなる哉傳右衛門ハ斯る寒地を踏み廻りて屈せず撓まず多年の宿志を伸ぶるふ至れり一身皆な膽にあらざれば能はざるなり斯くて傳右衛門は一旦松前の城下に立ち還り下國家老に面會して巡歷の際ありし事共備さに物語り多年の志漸く其緒に就きたるを謝せしかば下國家老も其喜び斜ならず莞爾として云へる樣貴公の沈勇にして才敏なるは吾れ先きに見たるに違はずとて賞しけり偖又傳右衛門は是より獵場を改良して支店の事務を整理し一先づ古郷に立ち歸りて嚴しく家道を修め其後は毎年獵場に通ひ一代の間四十餘度に及びたり蝦夷地獵場持ちと稱する事此頃より始りしとぞ傳右衛門は永の年月勤儉の効を積み船を蓄へ海産を輸入し晩年には資産大に增殖し寶永六年二月八十三歳にして歿す傳右衛門一世の大業後世の人豈に感憤せざるべけんや其後二世三世を累ぬるに及び倍々豪商の名を博し當代貞二郎は其十代の

孫なり頗る果斷力に富み能く時勢に投じて商機を制す幸て先代福山の支店を本店となし名代人を置きて店務を整理せしめ毎年自ら北海道に赴き業務を監督して怠らず是れ西川家創業以來の例とせり斯くて當代貞二郎は若年にして業を襲き明治の世運に際し早くも時勢の變遷を察して福山の支店を廢し更に後志國忍路に北海道の總店を置き各分店出張店を統べしめ名代の名義を廢して自分之れに臨み總理人を置きて之を監督し近世年に月に盛んなり世俗其屋號を呼びて中一と云ふ傳右衛門が一たび豪氣勇膽を北海道に點じたる燈は代を累ね世を積みて勢力倍々熾んに光明四方に光燄せり實に膽力大なれば物事に瞠若せず勇氣盛んなれば竟に宿志を伸ぶ傳右衛門の一身は皆な膽なりと評すべし

今人の傳

○神崎郡の部

○塚本みさの事

寡婦は節操を守て老母を養ふ

手代喜助は主家の再興を圖る

十九世紀の空氣を吸ひ明治日進の今日に生存する婦人中猥りに男女同權の四字を口に藉りて婦德を破り一の節操もなく男女同權の大意をも解せざる厄介婦人もあり或は漫りに男子の言行に摸擬して糞理窟を並べ立て婦人の美德は事に當て道理を云ふも常にい順柔と謙退に在ることを知らざる粗暴婦人も亦尠なからず吾國も今日い戊辰以前に於て支那主義に心醉せし舊日本とは異なり婦人を目して百年の苦樂は他人に依ると壓する時にあらざるなり婦人教育の途開らけ是迄地に落ちし婦人の地位を高めんとするの今日なり故に身は明治の今日に生存するも内に婦德を破り一の節操もなき婦人は明治の婦人

にあらざるなり又た假令戊辰以前に於て婦人教育の途も開けず婦人の地位をも高めざる舊日本の婦人ふても婦德を脩めて節操ある者は明治日進の婦人なり偖て說く神崎郡川並村の商人にて河井兵左衛門の妻塚本みさは天保年間の人にして同郷なる金堂村日野屋傳藏と云へる人の娘なるが二十年の春を迎へし頃兵左衛門の妻となり和順にして夫を助け又た能く姑婦に事へて家内一同歡ひの内に日を送りけり人間の悲歡は一ならず歡びの内に悲し到り嘉永元年夏の頃夫兵左衛門は大坂にて病死せしより寡婦となり愈々自ら家政を治むるあとなりしかば夫兵左衛門が世に在りし時の負債を嚴しく督促せられし故今は詮方なく家宅田畑を賣代なして其負債を返し困苦の内にも能く姑婦に事へけり斯くてみさゝ夫生前の時とは事異り涙と供に詫住ひ憂き月日を送りしが以前より使ひける手代に今宿喜助幼名太三郎と云へる者あり忠義に凝りたる殊勝の性質にてみさの哀しきを見るに忍ひず或日みさに向て云へる樣事の大小ゝ異なれども主人の爲

に忠義を盡すは家來の本分拙者は未だ若年と云ひ身不肖の者なれども是より奮て主家の再興を圖るべければ家事困難の際とは云ひながら貴女は元來節操正しき御心を今ゞ愈々勵まして專ら老母を養護せられたしと述べければ一分四什を聞き居たるみさゝ大に喜ひて汝の忠義に厚き心は豫てより感するに餘りあり吾れとても身不肖の女なれども夫の存亡一家の盛衰を以て爭でか志操を變へて女の道に悖るべき内方の事ゝ心に懸けず是より他國に商ひして早く家名を興すべし吾れも老母を御養護の暇ふゝ縱令如何なる困苦を守むるとも商賣の道を勵むべしと答へしかば喜助は愈々勇み立ち再び問ふて斯く御心の雄々しくて節操正しき方なるゝ豫て知りける所なれども貴女は元來容姿あり殊に寶子も在らせずして齡ひは三十路の花盛り如何にして孝と操を完ふし給ふやと云ければ打聞きてみさは莞爾と笑み开は何事に依らず心に惡しゝと思ひなば假令輕々しき事なりとも必ず行はざるべしと答へしかゞ喜助ゝ愈々滿足し恍び極つて涙潸然たり

孝を思ひに凝り固りし二人の男女八千八聲血に叫ふ杜鵑にハあらねども心も赤き血の涙聲を限りふ泣くならん是より喜助ハ旅商を始め餘念なく主家の再興を企てけるが或日旅先きふて誤て一分銀及び二朱金の贋物を受取りしことあれども之を公けにせば自然得意先ふも迷惑の掛ることなれば如何はせんと心配し主婦なるみさに相談せしかば己が貧しきを後にして人の難義を救はん爲めみさは自ら其贋物を切り棄てけり斯く婦人なれども目前の小利に惑はず男子に劣らぬ精神を聞き傳へたる得意先や仕入先にては大に感歎じみさは遂ふ其歡心を得たりとず又たみさは節儉を專らにして自ら薪水の勞に倦まず精神日々に新ふり斯くて日夜艱苦の内に姑婦を養護して家名再興に怠りなかりしが一朝不幸にして姑婦が病床ふ就きし故常ならず費用も增して仲々に困じたる折柄櫛笄は勿論衣類迄各氣もふく賣代ふして針灸藥餌の費に當てし抔實に貞操の婦なりしかば人々大に怪みて片田舍にハ復たある間敷美人と云ひ歳ハ三十前後の花盛り入婚せ

んと云迄む男もあり或は密かに說き寄りて一枝手折らんとする浮れ男も多かるに浮きたる心ハ更らになく己が姿たの柳腰、柳に受けて風折れせず單へに老母の病氣を看護りて世間の華美を避くるとは美人の溝逗憐むべし抔云ひ合ふて村里の評判高かりし故或人みさに問ひける樣貴女は未だ歳若くして實子もなきに能く老母を孝養して餘念なし开は如何にして堪ゆるやと云ければみさハ答て拙妾は是まで聊かも艱苦を覺へしことなし吾姑婦ふそ年來拙妾を愛せらる故に只其御心に逆はじと思ふのみなりと云ふを打聞き或人は喟然として歎回(あまたび)嘆息し貴女ハ眞に節婦なり艱難に居て艱難とせず孝を行て自ら敢て孝とせず實に貞なる哉孝ある哉とて去りにけり其後姑婦七十六歳の高壽を保ち安政元年五月悠然として逝けりみさは是まで張り詰めし心の弓の弦も切れ哀悼の涙漣然たり斯くて在るべきふあらざれは手代喜助を呼び寄せて懇ろに佛事を營めり偖又みさは是より愛知郡彦留村より入婚をして養女みつと配せしめ四人諸共和合して商賣を勵

みしかばみさの孝貞と喜助の忠義とを聞き傳へたる人々は愈々之を信用し實に信用は寶なる世の諺ふ漏れもせず商賣倍々繁昌し終に富裕の身となりて歡びつゝ家名を興せしとぞ眞にみさゝ天保年間の寡婦なりと雖ども其心事言行を見る時は正に明治日進の婦人たるに恥ちずみさの如き美人さら猶ほ且つ多年の艱苦に堪へて名を舉げ家を興す況んや世の醜婦をや

附言塚本みさは孝を盡し貞を立て世に稀ある婦人なりしかば同村戸長の上申に依りて大日本帝國賞勳局より褒章を拜受せり今其寫しを得たれは左に掲ぐ

日本帝國褒章之記

滋賀縣下近江國神崎郡川並村河井兵左衛門祖母　塚本みさ

資性順良中年ニシテ其夫ヲ喪ヒ遺債堆積家計窮困親戚交モ再離ヲ勸ムト雖モ矢ッテ貞節ヲ守リ能ク其姑ニ孝事シ一身ヲ以テ生計ヲ

擔任シ勵精盡力三十餘年遂ニ家聲ヲ振作スルニ至ル洵ニ奇特トス依之明治十四年十二月七日勅定ノ綠綬褒章ヲ賜ヒ其善行ヲ表彰ス

明治十九年二月十日

奉勅　大日本帝國賞勳局印

賞勳局總裁從三位勳二等伯爵　柳原前光㊞

元老院議官兼賞勳局總裁正四位勳二等子爵大給恒㊞

此證ヲ勘査シ第三十七號ヲ以テ

褒章簿册ニ登記ス

賞勳局秘書官從五位勳五等平井希昌㊞

賞勳局秘書官從五位勳五等横田香苗㊞

○小杉甚右衛門の事

知人と邂逅して身上を談じ

近江に歸り來て商運を開く

前進の商賈ハ後進の商賈を導き後進の商賈ハ前進の商賈に從ふ是れ商業社會開進の順序なり然れども一概に論ずべからず前進の商賈ハ人を見るの明ありて後進の商賈は人に見らるゝの價値あるにあらざれば前後相完ふして進むを得ず故に赤貧洗ふが如き身分より人に引き立られて商運を開き富を得る者ハ其人に價値ありて商業社會有用の商賈たるを知るべし神崎郡龍田村の商人小杉甚右衛門は幼年の時不幸にして兩親ふ分れたり其頃小杉家ハ赤貧洗ふが如くなりしかハ孤立の身とて獨立の事業もならず同郡なる川並村の親戚塚本久藏方に身を寄せて厄介を受け居りしが壯年の頃同家の本業なる小間物を擔ひつゝ奥羽地方へ持ち下りて商ふ内不圖した事より江戸の豪商堀越安兵衛と交を結びけり其頃堀越安兵衛は江戸の明商ふて義俠の譽れ高き人なりしが常々甚右衛門の勇氣ありて正直なるを愛せしとぞ却て說く甚右衛門は或日も親戚の小間物を擔ひつゝ奥州街道に隱れ

なき福島の市中を奔走して商ふ折柄誰れとも知れず背後より喘ぎ〳〵馳せ來り大聲を揚げて呼ひ掛けたり甚右衛門は驚きながら振り向けば髮を亂せし男なり二度吃驚して能く見れば這ハ別人ならず堀越安兵衛なり是れハと許り打ち喜び久々の挨拶もうこ〳〵ふ髮を亂せし譯を問へば安兵衛の云へる樣貴公と江戸で別れてより久々の月日を累ねたり些と話しのありし故何卒一度會ひたしと思ひしが此度所用ありて此地に來り先刻より床屋に入り髮を解かして居りけるが、と見れば貴公は小間物荷を擔ひつゝ足を早めて通る故思ひ掛けなき幸ひと亂れ髮の儘にて飛出せり何と云ふにも此處は往來幸ざ來よかしと手を引きて或茶屋に入り互に平座ざけり偖て安兵衛は亂れし髮を撫で附けながら懇ろに云へる樣話しとは餘の義にあらず貴公は今何くに居るや見れば信々しく小間物を擔ひつゝ此地方へ賣り捌けども日增しに開け行く今の世に小間物抔を商ふてハ利分も多からず夫れとても人に依ては是非もおし貴公は元來見處ある商人なり吾れ折りも

あらば貴公を引き取りて及ばずながら世話すべしと思ふにこうと親切なる言の葉を打ち聞きて甚右衛門は感涙を催して云へる樣幷ハ誠に辱けなし去りながら貴公は豫て知らるゝ如く吾れ不幸にして幼年の時父母に分れ孤兒の身の果敢なくも家畝を繼くべき樣もなし赤貧洗ふが如くにして詮術なきまゝ親戚の許に身を寄せて斯くハ些細なる商賣を勵むゞかし今吾れ親戚の家を辭し去りなば小間物の賣り人なしと事情を述べて暫らく斷れば安兵衛は其律義の厚きに感心して幷ハ最と感すべき話しなり此後とも貴公の身の輕くなり自在に商業を營む時に至らば及ばずながら一臂の力を添ふべしとて頭を傾け併し貴公は此地にて何か仕入れ置きしと問ふに甚右衛門は此度は何物も仕入れずと答へしかば安兵衛は手を掉りて幷は益なし商人として金を其儘占め置くハ忙ハしき日に眠るが如し何なりとも益あるべしと思ふ品物を仕入れて吾宅まで送れよかし貴公が歸宅の時迄ふハ手を盡して賣り捌かんと親切に勸むれば甚右衛門は深く其親切を謝し

て云へる樣此度は些と都合もあれば後々ハ心懸けて送り荷すべければ其時は御世話に預り度しとて別れけり其後大坂表にて段物三百疋程を仕入れ金一兩銀百目立の積りにて安兵衛の許迄送り置き暫らくして江戸へ下りし時安兵衛の宅へ行き先きに賣りし商品の勘定を受けしに思ひしよりは賣揚代金の餘分なりし故是れは不思議と問ひ質せば安兵衛は笑を含み關東にては金一兩銀六十目立なりとて賣揚代金を其儘渡せば甚右衛門答て云ふ樣上方にてハ一兩百目立なれば其割合にて受取らんと餘金を戻せども安兵衛は固より甚右衛門を引き立つる所存なれば强ひて其儘渡したり其頃東西の習慣異なり關東にてハ一兩六十目立あれども關西にては多く一兩百目立なりし故互に思ひ違ひせり斯くて安兵衛の勸めに依り甚右衛門は速かに歸國なし親戚塚本家を去て獨立し布商を始めんとて神崎郡能登川村の豪商阿部市郎兵衛を尋ね行き江戸へ送り荷を依賴したるに甚右衛門は其頃未だ家もなき身なれば市郎兵衛も不思議に思ひ資本は如何にと問へ

あらば貴公を引き取りて及ばずながら世話すべしと思ふにこうと親切なる言の葉を打ち開きて甚右衛門は感涙を催して云へる樣幷ハ誠に辱けなし去りながら貴公は豫て知らるゝ如く吾れ不幸にして幼年の時父母に分れ孤兒の身の果敢なくも家政を繼くべき樣もなし赤貧洗ふが如くにして詮術なきまゝ親戚の許に身を寄せて斯くハ些細なる商賣を勵むゞかし今吾れ親戚の家を辭し去りなば小間物の賣り人なしと事情を述べて暫らく斷れば安兵衛は其律義の厚きに感心して幷ハ最と感ずべき話しなり此後とも貴公の身の輕くなり自在に商業を營む時に至らば及ばずながら一臂の力を添ふべしとて頭を傾け併し貴公は此地にて何か仕入れ置きしと問ふに甚右衛門は此度は何物も仕入れずと答へしかば安兵衛は手を掉りて幷は益なし商人として金を其儘占め置くハ忙ハしき日に眠るが如し何なりとも益あるべしと思ふ品物を仕入れて吾宅まで送れよかし貴公が歸宅の時迄ふハ手を盡して賣り捌かんと親切に勸むれば甚右衛門は深く其親切を謝し

て云へる樣此度は些と都合もあれば後々ハ心懸けて送り荷すべければ其時は御世話に預り度しとて別れけり其後大坂表にて段物三百疋程を仕入れ金一兩銀百目立の積りにて安兵衛の許迄送り置き暫らくして江戸へ下りし時安兵衛の宅へ行き先きに賣りし商品の勘定を受けしに思ひしよりは賣揚代金の餘分なりし故是れは不思議と問ひ質せば安兵衛は笑を含み關東にては金一兩銀六十目立なりとて賣揚代金を其儘渡せば甚右衛門答て云ふ樣上方にてハ一兩百目立なれば其割合にて受取らんと餘金を戻せども安兵衛は固より甚右衛門を引き立つる所存なれば強ひて其儘渡したり其頃東西の習慣異なり關東にてハ一兩六十目立あれども關西にては多く一兩百目立なりし故互に思ひ違ひせり斯くて安兵衛の勸めに依り甚右衛門は速かに歸國なし親戚塚本家を去て獨立し布商を始めんとて神崎郡能登川村の豪商阿部市郎兵衛を尋ね行き江戸へ送り荷を依頼したるに甚右衛門は其頃未だ家もなき身なれば市郎兵衛も不思議に思ひ資本は如何にと問へ

ば甚右衛門は笑を含みて答ふる樣資本は江戸の堀越安兵衛より調達する約束なりとて只管依頼せし故市郎兵衛ハ安兵衛へ向け照會したるふ安兵衛より直ちに保証狀を遣はしたれば市郎兵衛も大に信用して近江布を送り荷せり夫より甚右衛門の商賣は堀越が尻押ありとの事明かになりたれば送り荷する者多くして遂に今日の富を致せり偖又阿部市郎兵衛ハ堀越の保証に依りて布を送り甚右衛門の振舞を見るに仲々勇氣ありて最と正直なりしかば幾程もなく保証狀は堀越方へ戻せしとゞ又聞く所に據れは堀越安兵衛が臨終の際甚右衛門に種々の事柄を依托せりと云ふ小杉甚右衛門は當年六十餘歳にして家道益々盛んなり嗚呼價値ある哉甚右衛門ハ當世に有用の商賣たる多辨を要せざるべし

○愛知郡の部

○横田德右衛門の事

頓智を用ゐて浪士を感せしめ

財を抛つて村中の窮民を救ふ

仁は固より人の尊ぶ所なれども施すべきに施さゞれば不仁となり施すべからざるふ施せば反て人を害するふ至る故に仁を行ふて害ある時ハ頓智を用ゐて之を避くるも好し害あき時は財を抛つて之を救ふも可なり爰に説く物語りハ愛知郡平松村の人横田德右衛門とて其始め家貧窶なりし故八歳の時蒲生郡八幡なる鐵屋宇兵衛方に奉公せしが折りも折りとて疱瘡流行し不幸や德右衛門も疱瘡神に摘まれたり主人宇兵衛は情け深き人なれば見るに見兼ねて德右衛門に云へる樣何程強き人にても病には勝たれねば疱瘡の癒る迄仕事を休みて養生せよ病に勝てねハ昔も今も同じふりと懇ろに諭せしかば德右衛門ハ主人の前に兩手を着き御言葉の通り病ふは迚も勝たれねば疱瘡の癒る迄宿元へ歸り仕事の出來る樣になりたらば又仕事に參りますと幼稚心にも律義を亂さず疫病を濟す迄暇乞して實家へ引き取り毎日養生を怠らざりしが程ふく疱瘡の神送りも濟みしかば再び宇兵衛方に

赴かんとしたれども父母親屬の勸めに依り諸所方々へ奉公して艱難辛苦の間に年を累ね二十二歳の頃に至りて犬上郡八丁村の油商北川六右衛門方に日雇奉公に入り込みて僅か一日に一文目の給金を貰ひ受け最と正直に勤むる内主人も其忠勤に感じ入り月に五日の暇を取らして保養させしが德右衛門は豫てより心掛けある者なれば仲々無駄に日を送らす主人に許されし五日の暇には一文目宛積みし給金を元手として主家の商品なる油糠を賣り廻はり頻りに資金を積みける が二十四歳に至れる頃漸くにして七兩三分三朱の資金を得たり德右衛門ハ二十四歳とて血氣盛なる時に至れども其辛抱の強きこと驚くべきにあらずや無情なる草木すら時至れば色附くものなるに況んや有情ある人に於てをや並大抵の者なれば遊氣勃然として堪へ難き頃ふるに遊び事には向ても見ず儲けし金をば積み立てゝ又もや之を資本となし佛具及び蚊帳を買ひ入れ折りを見合せ伊勢三州へ持ち下りて賣り捌き斯くて二つの春秋を累ねし頃ハ十八兩の資金を積めり是より商賣を一變して小間物及び太物類を仕入れ屢々東海道に持ち下りて商ふ内維新前にハ早や一廉の商人となり東海道持ち下り商の内にて一二と呼ばるゝ迄に進歩せり實に有爲轉變の世の中に金を得る程六ヶ敷ものハふし德右衛門が八歳の頃より守めし辛酸は幾何ぞや左は云ひながら塵りも積れば山となる月に一文目の給金は德右衛門が心を籠めし栽培に依りて花咲き果を結ぶに至れり實に世の中ハ信用と富みなる哉夫れは兎もあれ角もあれ德右衛門が多年の苦心空しからず遂に豪商の名を得たる頃は德川の一族が二百有餘年の平安を思ひし夢も打ち破れ覇政愈々衰微して衣は肝に到り袖腕に到る腰間の秋水ハ鐵をも斷ると勇みたる浪士原四方に起り幕府黨と勤王黨とは互ふ睥睨して氷炭相容れず實に天下ハ四分五裂せり其勇み立ちし浪士原の内には心悪しき者ありて擅まに村里に押し入り本陣の命と唱へ御用金の名を以て豪家に云ひ寄ること屢々なりしが其頃德右衛門は平松村にて豪家なりしかば或日浪士原突然押し來りて千五百兩

の用金を申附けたり時に德右衛門は何に思ひけん固く辭して更らに應ぜず只管斷りたれば浪士原ハ案外ふ思ひ互に劔を拔き連れて聲を振り立て眥を裂き樣々に嚇せども更らに恐るゝ景色なければ浪士原も今は呆れ果て口々に本陣へ引けと呼び掛けて德右衛門を本陣へ引き立て最と嚴しく之を督責せり引き立られて德右衛門は本陣に至り遙かなる末席に在り僅かに頭を擡げて居並びたる浪士原を仰ぎ見て潸々と泣きければ一人の浪士小膝を進めて其故を問へば德右衛門ハ漸く涙を拭ひ八歳の頃より艱難辛苦せし事供落ちもなく物語り且つ語を繼ひて云へる樣只今千五百兩と云ふ金を無理に調達せば出來ぬ譯ハなけれども元來私の資金と云ふば皆他人より借り受けて融通致すものなれば之を無理に調達せば最早明日より家内眷族を路途に迷ハすのみならず金主へ對して義理立たず去りとて之を調達せねば御上へ對して不忠ならん如何はせんと途方に暮れて胸塞り思ハず落涙致せしと最と悲しげに泣き出せば聞き居たる浪士原は稍々感じ入

り其方は仲々律義者なれども御上の命なれば此儘には過されず如何はするやと問ひ詰れば德右衛門は益々恐れ入り斯る事柄を申述べて ば實に恐縮の限りなれども三百兩位の金子なれハ如何樣とも取り計ひ必ず調達致すべしと答へ了りて再び頭を垂るれば左しもに荒き浪士原も互に顏を見合はして共に感涙を催したりとぞ實に鬼の目にも涙なり今德右衛門ハ千五百兩位の金を調達することの難きにはあらざれども其頃跋扈せし浪士原の内には道理も人情も辨へず猥りに本陣の名を冒し假へば五百兩の用金を千兩と云ひ爲す抔の僻事ありて油斷のならぬ世の中なれば皆な斷りて出さじとは思へども夫れでは國家ハ不忠なりと思ひ返して頓智を用ゐ愛に三百兩を調達して浪士原を感ぜしめ事全く治りて後驍々しき世の中に生活の立ち兼ねる村里の窮民に一千餘兩を拋つて救助の意を表せしとぞ偖てこゝ仁ハ施すべき時あり施すべからざる時あり面白き哉德右衛門は夫の荒々しくも亦猛々しき浪士原の面前にて潸々と泣きし一涙は遂に一千餘兩

の財を減じて村里の窮民を救助せり是れそ世に云ふ一滴千金の涙ならんか

○犬上郡の部

○前川太郎兵衛の事

幼年の時馬上に牙籌を學ひ後年東都に於て豪商と成る

幼年の時才能ある商人と雖ども誤て因循姑息の商人に從ふ時は終に習ひ性となり生涯碌々として口を糊する商人たるに過きず或は尋常一樣の商人にても幼年の時有爲活潑なる商人に從ふ時は終に習ひ性となり有爲活潑にして世を益する商人たるに至るべし況んや才能ある商人にして有爲活潑なる商人を主とするに於てをや後年に至りて豪商たる知るべきなり故に主人たる者ハ才能ある奉公人を撰ぶべきのみならず奉公人も亦有爲活潑なる主人を擇ばざるべからず然るに世間には因循姑息なる商人を實着律義の商人と誤り才能ある少年を

丁稚に遣はし天性を枉げて素丁稚たらしめ得々乎として舊弊を脱せざる固陋商人あり其甚しきふ至りては商業は元來活計の基ひを立るものなれば一家數口を糊するに至れば足れりと諦め廣く商機を進めて活潑の商業を營むハ危險なりとて時勢ふ捨てらるゝ頑商もあり吾商業社會の爲め慨くべき事柄にあらずや斯る商人原は早くも才能ありて有爲活潑なる商人の事跡に鑑みて其固陋頑愚なる心を改めよ左れば說く前川太郎兵衛は犬上郡高宮驛の商人なり太郎兵衛ハ幼稚の時より人に過ぐれたる所ありしが十一歳の頃同驛の豪商不破彌三郎方に奉公して日夜勉勵せり却て說く父の代迄は鹽物商にして毎日なんぞ如何と觸れて廻はりしかば其頃人々の口の葉になんぞ屋と呼びたり偖て太郎兵衛は僅か十一歳の頃ふれども家を興すの志盛んにして遂に自ら奉公ふ出でしかど主用の暇にハ算筆を學びて怠らず何卒壯年に至りなば家を興さんと勵めども主人の商用多端ふして思ふまに〳〵算筆を學ぶの暇なければ行商の度毎に馬上にて牙籌を學びし

とゞ實に志ある者の行ひハ都て奇異なり是迄馬上に於て讀書せし者あれども馬上に於て牙籌を弄せしハ未だ曾て見聞せざる所なり恰も螢を集めて燈びとゝし雪を積んで明りと爲すに異ならず太郎兵衛の勉勵を見る時は螢雪の勉勵と傳へし古事も未だ奇異とするに足らざるべし斯くて毎年撓まざる勉勵の功空しからず二十九歳の頃主家を退き江戸表に出でゝ開店せり時に安政四年なり其後幾何もなく商業頓みに繁昌し愛に始めて家を興すふ至りしが中年にして子なき故兄の三男新介を養ふて家督となし遂に本店を讓りて自ら江戸富澤町ふ隱居家を構へ小女に婚を迎へて更らに隱居家を相續させ江戸横濱京都大坂各地に支店を設け家業愈々繁榮に赴き當時は盛んに金巾類を賣り捌き一ヶ年に商金高二百萬圓内外と聞けり實に東京府下ふても屈指の豪商なり偖又太郎兵衛ハ現今に至る迄郷里ある犬上郡高宮驛に歸れば何より先きに舊主人不破彌三郎の安否を訪ふて恩義を忘れざりしとぞ其始終を完ふして誤らざるを知るべし又説く太郎兵衛ハ

常に子孫を警めて云へる樣人多くは資本の貴きを知れども信用の重きを知らず故に幸ひふして資本を保てとも又忽ちにして之を失ふ者多し信用なき資本は假令幾百萬の多きも水の泡ふ異ならず風一たび吹けば影だも止めず信用ある資本ハ大海の水に似て洋々として盡きず开ハ恩義を忘れざるふ在り吾子孫たる者ハ能く〳〵恩義を知りて信用を失ふ勿れ商業の本尊ハ信用なりと果せる哉此言や世には資本の多きを恃みて恩義を辨へざる商人なきにあらず斯る愚商は人に盛衰ありて世に遷變あるを知らず金さへ有れば大願成就信用抔ハ金にて求むべし金は敵の世の中と自ら之を述べながら金で敵を招くなり斯く金々と驚ぐ者は恰も資本の貴きを知るが如しと雖ども开は却て資本の貴きを知らず只金に迷ふのみなり恩義を知らざる者ハ信用なし信用なき者の資本ハ水泡に似たり人の愼むべきは傲慾より甚しきはなし若しも吾商業社會中人と國家に對する恩義を知らざる者あらば太郎兵衛の言行に鑑みて早くも改心せよ前川太郎兵衛は當年六十

一歳なり其長壽も亦祝ふべし

○薩摩治兵衛の事

勤儉三十八年一日の如し

事業既に熟して名聲高し

日本帝國の大都會に商旗を繁へして日に月ふ商域を擴め多年の事業既ふ熟して其名高き薩摩治兵衛ハ犬上郡四十九院村の農夫茂兵衛の長男ふして幼名を與三吉と呼びけり九歳の時父を失ひ家貧にして餘財なく聊かの田地は所持したれども父の代より他人の許へ抵當に入れ置きたれば思ふ儘ならず是より治兵衛は其母及び舍弟と都合三人打ち連れ立ちて住み慣れし吾家を去り村外れの小屋ふ假住ひせしが固より粗造の茅屋ふれば雨露を凌ぐに足るのみなり四百四病の疾より貧程苦らきものハなし高が女の手一つにて衣食を給する術もなく一家を擧げて寒に叫び饑に泣く許りなりしかど治兵衛は更らに驚かず其頃より善く母に事へて家を興すの志あり斯くて親子三人は貧苦

の内に一年を過ぎけるが治兵衛ハ甫めて十歳の時奮然として思ふ樣斯く碌々として打ち過きなば何を以て家族を養ふべき海より深き恩愛の母上に孝養を缺くに似たれども今より暫らく家を辭し去り關東に赴きて商人となり家を興して末永く孝養を盡さんと決心し或日母に決心の程を告げしかば母は大に驚きて幼き身の髫束なしと止むれども治兵衛は强ひて暫らくの暇を告げ江戸を指して下り行き或商人の許に奉公し忠勤と節儉を旨として些細たりとも金錢を得る時は自ら使はず皆積み置きて古郷なる母の許に送金せり其勤儉なる三十八年の其間恰も一日の如くにして更らに倦まず撓まず其後遂に別家して東京日本橋區富澤町に商店を開き木綿及ひ金巾を賣り捌きて偏に家業を勉勵せしかば追々資本增殖して盛大に赴く折柄同區ふる堀留町ふ支店を設けて洋絲商を始めたり實に治兵衛は珍らしき商賈ならずや僅か十歳の時早くも志を立てふ東都に出で深く身を愼みて商利の存する所を探り節儉を專らふして孝養を怠らず始終志を一にして

商機を謬らず巧みに時勢を制して其名高し苟も一斑の智識を備ふる者にして志なき人はなけれども其志をして始終一轍ならしむるは萬人の難しとする所なり吾國も維新以來頓みに商業の價値を進めし折柄遽かに志を決して商人の仲間入りする者多くして其内には一敗の爲に屈せず撓まず遂に其志を達して天晴れ賴母しき商人となれる者なきにあらず然れども幷は寥々として恰も晨星の如し多くは一夜造りの出來合商人なり一夜造りの出來合商人其志ハ固より嘉みすべし又其志を達して吾國の地盤を堅むる者は無論賞すべし然れども彼等多くは資本さへあれば立派なる商人の心地して餘りに商業を輕々しく見做すが故に東雲に咲く朝顏の如く乍ち咲ひて乍ち萎む開き行きける今の世に斯る弊害なしとせば兎も角も若し其事實のありとせば最も幼き十歳の頃より舊然として志を立て始終其志を一にして著しき結果ある治兵衛の如きは世に珍しと云ふべきのみならず商家の子弟たる者は豈に其事跡に倣はざるべけんや斯くて治兵衛ハ商域を擴

めつゝ又もや横濱仲通りに出店して一業を增加せり今や治兵衛の配下に在りて商業上の指揮を受くる支配人以下六十餘名の雇人あり其盛大にして商歩を進むるや喋々を俟たざるなり元來治兵衛ハ鄉里を思ふの情切ふして去る明治二十年某月日ハ亡父茂兵衛の五十回忌に相當せしかば欣然として鄉里なる四十九院村に立ち歸り親戚故舊三百餘名を相會して盛んに佛事を修め清酒淨肴の間に胸襟を開ひて舊情を談じつゝ偖ふ感涙を催ふせりとゞ世人の所謂古鄉へ飾る錦とは是等の事を云ふなるべし偖又治兵衛ハ鄉里に歸れる時一千三百圓にて愛知郡本持村の田地を買ひ入れ其收穫米を以て毎年四十九院村及び本持村の窮民に施せり四十九院村は治兵衛の鄉里にして本持村は其母の鄉里なり其他學事を奬勵し海防事業に贊成せる抔美事篤行頗る多し治兵衛ハ眞に鄉里を思ふの情切なりと謂ふべし鄉里を思ふの情切なる者は愛國の心も亦切なり愛國心なき者ハ假令巨萬の富を有するも日本民族にあらず巨萬の富を有して驕らず吝あらず眞に愛國心ある商人ハ眞に日本民族にし

て商業社會の要素たり薩摩治兵衛も亦商業社會の要素なる哉

○坂田郡の部

○下郷傳兵衛の事

帳簿を速かに見て紙々營あり

夜に乘じて貧家に米錢を投ず

幼年の時より商利を見るふ敏く明治の新社會に活達の商業を營む下郷傳兵衛は幼名を寅吉と呼び坂田郡長濱田町の商賈なり父ハ傳右衛門とて家貧しく僅かふ餅屋を業とせり傳兵衛年甫めて十五の時家政を繼ぎ家事の整理を計りしかど其頃ハ負債あるに加へて家族も多く殆んと困難を極めしが或日傳兵衛ハ心私かに思ふ樣人の浮世に棲むハ舟に乘りて湖水を渡るが如し舟堅牢ならざれゞ忽ち溺る縱令才あるも學あるも資産なければ之を伸ぶる能はず是より千難萬苦を厭はず商業社會に奔走勉勵して家政を堅め徐ろふ事業を興さんとて資産を積むを務めけり斯くて又思ふ樣些細なる薄き資本を恃みつゝ家業

のみに身を置かば何れの時か天下の豪商と肩を並べんや及ぶ限りハ資本に應じて手を伸し追々各地に支店を設くべしとて茲に古道具商を始め十八歳の頃屢々京都及び大坂に往來して古道具を仕入れ若荷を待て糶市をなし稍々資本を增したれば十九歳の時米商を始め損益知れざる投機商に艱苦を嘗めて寢食を安せざる迄に心を盡し二十六歳に至りて米商を專業として、他業は一切之を廢し新たに長濱の町に米穀賣買所を設けて舊彦根藩年貢用米券を買賣し又種油商を始めたり其頃は資産も增殖して着々商機を進めけるが傳兵衛は商用多端の折柄自分より遙かに年長ある手代數名を雇ひ入れ東は四日市北は敦賀小濱西は大津京都及び大坂へ商業を擴張せり偖又傳兵衛ハ米商及び油商を營みて焦心苦慮し其後肥物商を加へて大津に支店を設け專ら米油を商ふ内、機に乘じて京都に支店を開きしが傳兵衛或時深く考へつゝ京都は後年米商營業の爲め適當の地にあらざるを看破し開店後一ヶ年を經て終に閉店し四十二歳の時大坂製紙所を買ひ入れて役

員及び職工に至る迄盛んに改革を行ひけり此製紙所ハ明治八年の創立に係り其の始めは一時隆盛なりしが爾後漸く萎靡して振はず明治十五年に至りて所持人屢々替り大坂に於てすら之れを維持せんと欲する者なきに至りし頃傳兵衛は斬然別ふ見る所ありて一手に買ひ受け百事改良を加へて今日漸く好結果を見るに至れり傳兵衛は商業上取捨斟酌の秘訣に老練の商賈たる辨を要せざるなり却て説く傳兵衛は年毎に商業を擴めて資産愈々増殖し縣下有名の商人となりし頃北方鐵道布設の舉あり停車場への通路不便にして乘客の難澁尠なからざる折柄自ら奮て數千金を抛ち公衆の爲に一の橋梁を架せり社會公益を思ふの厚きも亦知るべきなり偖又傳兵衛に一の長所あり各支店を巡見する毎に金錢の出入を暗記して帳簿を見るの速かなる紙々閃然として臂あり若し止りて紙を折る時は必ず過算若くハ減算ありて其錯誤を見出すと神妙なり如何に商用多端の時にても先づ帳簿を檢閲せし後にあらざれば嘗て餘事を問ふことなし故に傳兵衛の配下

に居る商人ハ孰れも算筆を學びて熟達せりとゞ眞に商業上配下を激勵せしむるの妙ありと謂ふべし斯くて傳兵衛は名を舉げ家を興して有名の商人となりたれども毫も財を恃て人に驕る抔の卑劣心なく富むに隨て人を慈むの心深し明治十六年の頃米價非常ふ騰貴せし時貧民の困苦を見るふ忍びず夜に乘じて家僕を從へ密かに貧家を訪ふて米錢を投じ去ること屢々なれども更らに人に知らしめず又地方罹災者を救恤せり然るに貧民中救恤に甘じて業務を惰る者の淺間しきを嘆息して思ふ樣斯く徒らに救恤せば惰民を養成するに似たるべし寧ろ就業の道を開ひて勤勉努力せしむるふ若かずとて百方思を凝らし終に地方相應なる製絲場を設けんと思案を定めて同志者を募り去る明治十九年より着手して翌二十年に至り始めて近江製絲場を設立し爾來無産の老若男女をして該工場に就しめたり今日に至る迄爲に糊口の途を得たる者數百名の多きふ及べりと聞く傳兵衛は當年四十餘歳にして常に自ら云へり吾事業は未だ半ばに至らずと此心ハ以て萬

業を貫くに足れり下郷傳兵衛も亦活達の老商なる哉

○淺見又藏の事

民業を鞅掌して最も功あり

濱縮緬海外輸出の嚆矢たり

常に不屈不撓を以て人に賞せられ始めて長濱縮緬を米國へ輸出して好評を得たる淺見又藏ハ坂田郡長濱宮町の商人ふして若森彦右衛門の三男なり幼年の頃同所なる大塚吉兵衛方に奉公せしが同人の周旋にて淺見長兵衛方の養子となり表具師及び縮緬織を業とせり是れぞ世ふ云ふ長濱縮緬なり又藏は當年五十二歳なるが若年の頃より獨立の志を抱き他ふ依て事を成すは男子の耻る所なりとて事を勉め物に忍び假令小事たりとも叮嚀反覆思を凝らすふあらざれば事業に着手せず一旦思を決して事業を興すに當りては一時の損害ふ遇ふも屈するなく一勝の爲に喜はず一敗の爲に憂へず一勝一敗を以て事業の常とせり正に是れ又藏が平生長所とする所なり明治の商人たる者此豪

邁なる氣象なかるべからず淺見又藏ハ當世の事業家と稱すべし是れ有用の商人なり若夫れ商人にして一勝の爲に甚しく喜ぶ者は亦一敗の爲に憂ふること甚しく假令如何ふる好事業と雖ども忽ち抛ち去るに至るべし商人の不幸是より甚しきハふし滔々たる世の中ふ斯る失望の甚しき商人なきや無ければ固より太白を捧げて祝ふべし若し有らば幸ひに淺見又藏の事跡に倣ふて豪邁なる氣象を養成せよ扨は餘事なり斯くて又藏は縮緬を製造して京都なる下村大丸へ卸賣を爲せしが日を逐ふて之を擴張せり其後久しく地方の公事ふ關渉して學事を奬勵し民業の振起を企て又ハ水陸運輸の事に盡力して頗る功績あり然るに琵琶湖往復の漕船ハ先きに大津及び八幡の兩派に分れ居りしが又藏の周旋盡力に依り一致團結して一派となり大ふ乘客の利便を得たり又或時長濱の港口を改築して湖上漕船の便を計り當時は太湖漕船會社の頭取なり又藏は豫て利財の道に長じ曾て第廿一國立銀行の創立を企て會員一同に撰ばれて頭取となり事務を整頓せる折柄

同業者なる第六十四國立銀行は他ふ事情ありて閉店すべき場合に立ち到りしことあり時に又藏は痛く嘆息して云へる樣盛衰興敗は浮世の免れ難き所にして同業相救ふハ當然の義務なり此時ふこう一臂を添へて焦眉の急を救んとて自ら奮て改良維持の策を立てしかば株主等は互に愁眉を開き又藏の沈毅篤實なるを賞讃して止まず遂に推撰して頭取職を依頼せしかば又藏も辭するに由なく其儘承諾し銀行事務を改良整理して信用益々厚し却て說く又藏は外には諸會社の事務を整理し内には濱縮緬の輸出を試みしかば思ふに增して米人の好評を得たり正に是れ吾國に於て濱縮緬海外輸出の嚆矢たり眞に經濟上に實驗ある商賣と謂ふべし世には入るを計りて出るを制すと云へる經濟上の確言を誤解して國家經濟は輸入を計て輸出を制すべしと爲す者なきにあらず誤解も亦甚しからずや入るを計て出るを制するハ貨幣の事にして輸出輸入とは物産の事なり故に國家經濟より見る時は自國産の輸出を計て外國産の輸入を制せざるべからず自國産を

輸出すれば其價格として外國より貨幣を入るゝなり之を要するに入るを計て出るを制するとハ金の事にして輸出輸入とは物の事なり又輸入とは自國に於て生産せざる物品にして國人の需要缺くべからざる場合に際し一時其需要に應じて供給せんが爲め止むを得ず外國より買ひ入るゝを云ふなり畢竟國産の輸出を計らざれば國家經濟の富裕を致すゝと能ハざるものなれば又藏の如く早くも國産を海外へ輸出して好評を得る者は自分の利財にも國家經濟にも熟達せりと云ハざるべからず宜なる哉又藏が平生取る所の主義ハ公利公益を進むるに在り曾て道路橋梁等の改修に義捐せしことも屢々にして常に慈善の心に富めり遂ふ特旨を以て從七位ふ叙せられたり又曾て長濱なる湖水の渚りに水面に臨みたる別莊を造り雲慶館と號す撥きに今上皇帝陛下御巡行の際御一泊遊ばされしとぞ實に淺見又藏ハ榮譽の商人なりと謂ふべし

○野洲郡の部

○高田長兵衛の事

人ハ資金の外ふ資本の有るあり

二斗米の外に資本有て家を潤す

物の因は微にして果ハ明なり人間の成業は細々積みたる勞力の報酬にして其因は至微なれども其果は堂々として至明かり若し其因ハ大にして其果の小なるものありとせば开ハ業を成すにあらずして業を破るに至るべし其因の至微にして勞力の細々たるに堪る者ハ其果の至明にして堂々たる業を成すを望めぞなり又勞力に二種あり一は精神勞力にして一は肉體勞力なり商家ハ外面より之を見れば肉體家の如くなれども其實は精神勞力家なり故に有形資金の外に無形の資本あり有形資金と共に之を使用する者は縱令其因ハ至微なるも其果は堂々として成業を得るや明なり這ハ一已の私言にあらず天下公衆の是認する所なり高田長兵衛は野洲郡江頭村の商賈なるが其始めは同郡八夫村高田善兵衛の四男なり長兵衛は幼年より何處となく行ひに

節度ありしが九歳の時父の命ふ從て某家の丁稚となり夫より歳月を累ねて二十歳の男子業なきを恥る頃熟々身の行く末を思ふ樣吾も一人の男子として何時迄でも主家に養ハれ碌々として日を消すは最と恥かしき限りふり夫れは兎もあれ角もあれ若し一朝不幸にして主家を放逐さるゝことあらば忽ち活路を失ふべし好し又斯る不幸のなきふもせよ主家の家業は吾獨立の家業にあらず吾れ不肖ながらも一策を設け獨立して成業を得んと決心し速かに主家を辭し去りて家兄に決心の程を物語り些少なりとも資金を得て商賣を始むべしと思案しつゝ家兄に事の趣を告げしかば家兄も大に賞讃して云へる樣實ふ決心の程は深く左袒する所なれども世人一業を營まんとせば多くは資金の多少に注目して節儉勉勵の良資本あるを知らず猥りに資金の多きを欲して節儉と勉勵を欲せざるが故に失敗を取るふと多く利益を收むることと尠し汝是より節儉と勉勵を資本として成業を遂げよと訓へつゝ米二斗許り取り出し些少なりとも兄の寸志なりと云ふを打ち聞

きて長兵衛ハ大に悦び玄米二斗を貰ひ受け現住地なる江頭村ふ立ち歸り爰ふ始めて小屋を借り受け一日たりとも徒食せずとて玄米一斗を食料に充て殘る一斗は賣代ふして資金を拵へ是より屢々八幡に出でゝ餅を買ひ入れ常に家兄の訓を心に占めて行商を勵みけり斯くて又行商の時往來に草鞋の棄て置きたるを見れば拾ひ用ゐて新しき草鞋を買ひ求めず節儉と勉勵を旨として高利を貪ることなし遂を薄利も積りて若干の家産を得たり實に長兵衛の資金は僅かに玄米一斗を以てしたれば其價五十錢に充たざるべし之れを資金として餅を買ひ入るゝも五十錢の資金ふして幾何の利分あるべきや薄利なること知るべきふり勞力を厭ハず細々(ほそ〳〵)として其報酬を求めしは資金の外ふ良資本ありしや明かふり長兵衛は有形の資金を以て商品を買ひ入れ無形の資本を以て之を賣り捌き日を累ねて若干の利分を得たり商家の爲に無形資金の必要なる多辨を要せずして瞭然たり偖又歳月の經過するは隙(ひま)行く風ふ異ならず長兵衛四十八歳の頃は餘程資金も增加せ

しかば穀物及び肥物商を始めしが節儉と勉勵の功績空しからず追々人々の信用を得て終に一日金百兩宛の商賣を爲すに至りしとず眞なる哉商人は資金の外に資本の有るあり長兵衛は二斗米の外に資本有て晩年家を潤す當年ハ已に七十有餘の高齡を保てども老て益々矍鑠たり高田家は兩家に分れて愈々繁榮なり實に物の因は微にして果は明なり天下の事物皆然らざるハなし殊更人間の成業は細微の勞力を積むにあらざれば得る能はず正に是れ成業の因にして其果は堂々として至明なるに至るべし這(こ)は高田長兵衛の事跡を見るも敢て過言にあらざるを知らん然るに世の事を好む者說と爲して云ふ細々として勞力を積むが如きは天保時代の事にして明治開進時代の事にあらずと迂說も亦甚しからずや开ハ資金に餘りある商人に云ふべくして資なき商人に云ふべき事柄にあらず苟も階級的の進歩を好む者にして生產勞力と不生產勞力の區別を知らば高田長兵衛の事跡に鑑みすして可ならんや

○蒲生郡の部

○山添直次郎の事

雅俗利義に於て孰れも快あり

尺蠖の屈伸を見て頗る感懼す

昔時より美術技藝に熟達して其名を當世に顯ハせし商人も尠からざれども开ハ概ね己が本業なる商法を廢棄して藝苑籍中の遊男となれる者多し是れ商人社會の廢物なり然るに明窓の下淨几に凭り滿堂の清雅を眺め身は美術技藝に熟達して藝苑籍中の人とならず又眼前の小利に囿齪せず渾々たる泉の如く永く涸れざる大利を計畫して愉快に商運を進むる者は眞に活達の商賈あり山添直次郎は蒲生郡八幡の商人ふして別名を謙と呼び號を致恭快堂と云ふ當時は京都御幸町に住す其始め染物業を營みて諸國に旅商せしが後年に至りて家を弟傳治郎に讓り自ら京都に移住して廣く蒟蒻粉を賣り捌き又株式取引及び金貸しを營業して高利を貪らず乘すべきの時と收むべきの利とを

見て賣買取引し曾て義俠心を失はず年々財寶を利用して家道大に興れり斯くて直次郎ハ天性風雅を好み專ら畫繪に通ず先きに貫名菘翁を師として學事を倣め當世の諸名家と交際を結びて相來遊せしかど風雅を好むの故を以て俗情を失はず義俠を好むの故を以て商利を廢せず俗に居て雅を娛み利に居て義を樂む實に直次郎は愉快に商運を進めたり商海の一快波と云ふべきか快波は之を眺むるも清し清き波は商海の汙れを洗ふべし却て說く直次郎ハ豫て生產工業の諸會社に往來して紳士豪商と相謀り迭みに奔走周旋して功績尠からず其名聲雅俗の間に著しきも道理なり或日直次郎は獨り庭前にありて左右の草木を眺めける時尺蠖の屈伸するを見て思ふ樣吾れ今少しく商業に伸ぶるを得るものは其昔久しく屈せしが故なり今若し之を恃みつゝ傲然として慢り奢然として驕りなば商業の衰微を招くべし天下の廣きも誰れか其伸ぶるを嫌ふ者あらんや能く伸びざる者は先きに能く屈せざるが爲なり其能く伸びんと欲するに先ちて能く屈するハ尺蠖

の如き小蟲すら猶且つ之を能くす況んや萬物の靈長たる人間をやと一は感じ一は懼れ是より更めて蠖軒と號す其妻ひでは和歌及び書を能くし居常怜悧の婦人なりしが惜い哉今や歿せり嗚呼直次郎が胸局の廣き多辨を要せずして明かなり胸局の廣きが故に商業の外に餘地ありて雅致風流を好み諸名家と交際を結んで相來遊せしかど曾て商利を失はず却て爲に商運を進めたり眞に活達の商賈にあらずや

附言灌園居士の物しる蠖軒の說を得たれば左に揭けて讀者の參考に供す

蠖軒說

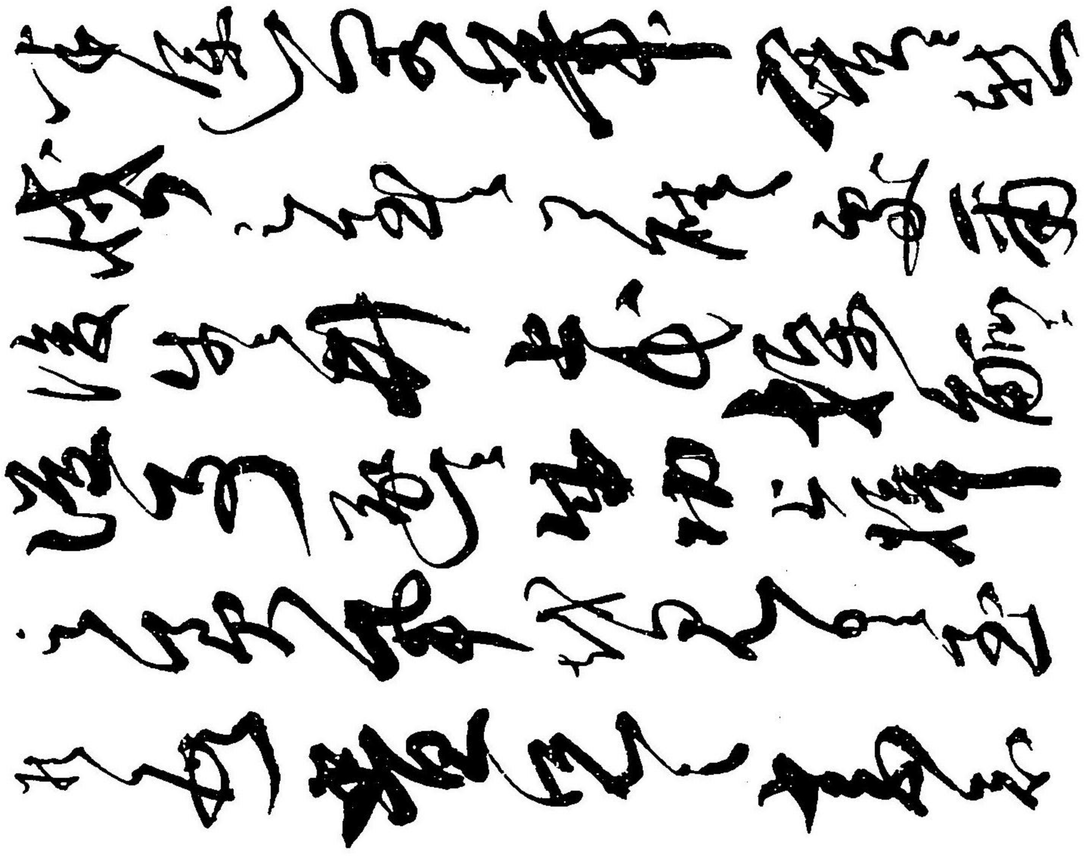
蠖之爲蟲似蠶而絕少、多在桑上老亦吐絲作室、其每欲進步、先聚屈其體、已屈而聚、已聚而舒、則遂寸ゝ前進、故一名曰步屈、謂其一步一屈也、一步一屈、即易傳所謂尺蠖之屈、求信者以小喩大、則三才之理寓焉、友人山添致恭、嘗獨立于庭、偶見尺蠖之屈伸也、惕然有所感懼、遂更號其居曰蠖軒焉、而未自言其所以感懼也、聞者疑之、嗷々然、爭詰曰、何也致恭之好紛更致恭乃非都下一豪賈邪爲人快活、喜義俠、有心計、居奇摻贏、立累鉅萬、家道之興、勢如破竹、不可復抑遏、則其快可知也、性好雅藻、最嗜繪事、六法三病講之、有日廣與當世名流交、皆得其驩心、而夙昔所師事、則爲貴名先輩、先輩嘗取古語、遍書其堂、曰、天下第一快活、蓋亦稱致恭之爲人也、致恭快其語、遂自號快堂、近者乃倣築、所謂快堂、淨几明窓、滿室清雅、見者快之、而致恭暇則槃礴其中、隨意揮灑、擲筆呼快焉、則其快不問可知爾、世固非無快人也、然事分雅俗、途岐利義、今致恭則於俗亦快、於雅亦快、於利與義兩亦皆快、則快活之稱符矣、快堂之號允矣、而致恭有何所不快、輙紛々然更其號之、爲余乃爲致恭辯之、曰、吾子所言致恭之快、即致恭之所以更其號也、子徒知致恭之迹而未知致恭之心也、見致恭之有今、而未見致恭之有昔也、夫快者伸也、不快者屈也、致恭今日之身迹誠伸矣、孰知其心之視其伸猶視其昔之屈哉、余聞致恭之昔負販於湖東也、敝蹤布衣重繭胼胝、役々乎、日足奔四方、唯錐刀之利是營、如此者、蓋亦有年、及其歷涉百艱備嘗萬苦、然後始致有今日、然致恭之心則以爲吾之今日非不快也、顧以快自

居是恃伸而弗屈也、夫今之得暫伸者以昔之久屈也、則知今之恃伸而屈、是所以致後之復屈而不伸也、人孰不求其伸、然而往々不能伸者正唯坐弗能屈耳、一屈一伸、小蟲且能之然況人乎、人而不若蟲豈得復參天地乎哉、此乃致恭之所以感懼尺蠖之步而自號以警也、疑者曰致恭之所以更其號則聞命矣、抑致恭不自言其所以感懼而子何以知其心如此、曰致恭方以謙爲名、謙之爲德著於易散見諸經有先屈而後伸之義焉有居伸而能屈之意焉、然則致恭於三才之理講之亦熟矣、是又所以觸緒發蘊即事感懼也歟、嗚呼致恭而更其名則余不得而知也、苟不更焉則致恭之心余固知之矣、而子尚疑邪、疑者終屈是爲蠖軒說

明治十七年甲申八月中浣

灌園居士　石津發拜撰

近江商人　終



少彩

西川勝彦 田中莊吉 謹

頁	行	誤	正
緒論の内			
四	九	編、著、	編述。
六	一二	編、著、	編述。
本文の内			
二	九	％以て	％。を以て
一二	七	結附け	結び附け
一二	八	忘れたるもの	遺れたるもの
一六	一一	ありど、謂ふべし	ありと謂ふべし
一八	一	來たし身、も首も	來たせし身の首も
一八	五	豪商に、して	豪商にて
二二	五	此と云び、	此と云ひ。
四〇	一〇	何と思ふは」の下	はの一字を脱す
四七	九	國益を益す、	國益を增す。
八〇	七	珠、玖、家	珠玖家
八八	七	十四萬兩」の下	餘の一字を脱す
九〇	四七	謹、儉	勤儉
九一	一〇	道連」の下	れの一字を脱す
九二	一二	惣兵衛は」の下	又の一字を脱す
九三	一二	謹、儉	勤儉
九七	七	大和の國に、趣き	大和の國に赴き
九九	一〇	悟ることも」の下	亦の一字を脱す
一〇二	五	土地なれば若き	土地なれば年若き
一〇八	一〇	區々して	區々として
一一四	一	石井、三郎右衛門	石井四郎右衛門
一一五	一〇	片時、を忘れず	片時も忘れず

一一五	一一	近却するに	返却するに
一二二	九	宛ばなから	宛なから
一二六	四	怜悧かり	怜悧かり
一三七	八	萬事にも	萬事に
一四七	一	寧ろ	寧ろ
一五二	一四	燻らして	燻らして
一五三	三	笑ふべきもあり	笑ふべくもあり
一五五	二	高井作右門、衛	高井作右衛門
一六一	二	貧窮	貧窮
一六二	一	本資として	資本として
一六二	一〇	惹き起する	惹き起す
一六三	五	感涙を催して思ふ樣」の九字は贅字	
一六三	六	此草鞋	草鞋
一六七	三	醉人めきたる	粹人めきたる
一六八	一	牡丹餅	牡丹餅
一七四	八	最篤實	最も篤實
一八一	一三	樂の一ふして	樂みの一にして
一八三	八	自ふ嫌ふ	自ら嫌ふ
一八五	一	立派ふて飾り	立派にて飾り
一八八	四	理不盡處行 西には伏見及び二本松の服爭となり	理不盡の處行 西には伏見の服爭となり
一八八	八		
一九二	二	目的にあらず	目的あらず
一九七	六	學者にして	人にして
二〇八	二	理右衛門	利右衛門
二一五	一二	近きづて	近づきて
二二四	一一	河井兵左衛門祖母	河井兵左衛門妻
二二五	六	元老院議官兼賞勲局總裁	元老院議官兼賞勲局副總裁
二二七	九	何と云ふにも	何を云ふにも

二二八	一〇	何か仕入れしと	何か仕入れしやと
二三一	一〇	勝てねは	勝てぬは
二三二	一三	伊勢、三州へ	伊勢參州へ
二三四	一一	路途に	路頭に
二三九	一四	早くも	早くも
二五二	九	肉體家の如く	肉體勞力家の如く
二五四	六	逐を	逐ふ
二五五	九	說、と爲して	說を爲して
二五五	一一	資なき	資金なき

明治二十三年七月二十日印刷
明治二十三年八月五日出版

正價金七十五錢

編述者　岩手縣士族　井上政共
東京市麹町區飯田町二丁目廿五番地寄留

發行者　滋賀縣平民　西川勝助
近江國八幡町字魚屋町元十番地平民

印刷者　廣瀨安七
東京市日本橋區兜町一番地製紙分社

發賣所　松桂堂
近江國蒲生郡八幡町字魚屋町元十番地

取次販賣所

東京市日本橋區通三丁目　丸善書店
東京市日本橋區本町三丁目　金港堂
京都市御幸町姉小路　藤井孫兵衛
仝　三條通御幸町西へ入　大谷仁兵衛
仝　三條通寺町西へ入　山中勘次郎
仝　三條通御幸町西へ入　杉本甚助
大坂市本町四丁目　岡島眞七
近江國滋賀郡大津町　澤宗次郎
近江國蒲生郡八幡町　大内幣六
後志國小樽堺町　白鳥宗次

27
111

27
111

202360-000-6

27-111

近江商人

井上　政共／著

M23. 8
EDD-0012